

# 東方暗殺録

干し干し柿

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、月の都を含む、月の7割が殺センサーによつて破壊された。はたして、霊夢達は元の月を取り戻せるのか？

注意

- ・東方は虹龍洞での異変解決後の時の話です。
- ・個人的に書きたいので、業、律は進学した時からいるような感じにしています。

この作品は東方projectの二次創作です。

# 目次

異変の時間	1
説明の時間	6
弾幕の時間	10
野球の時間	14
能力の時間	19
糸成の時間	22
期末の時間	28
作戦の時間	33
島の時間	37
決行の時間	40
遊びの時間	46
恐怖(?)の時間	53

祭りの時間	57
料理の時間	61
事件の時間	66
追跡の時間	71
技術の時間	75
体育祭の時間	79
謝罪の時間	83
死神の時間	86
圧倒の時間	90
番外編 死神の幻想郷	94
学園祭の時間	97
前後の時間	101
演劇の時間	106

番外編 新年の暗殺教室 | 112

番外編 殺センサーの東方ボス化

116

復讐の時間 1時間目 | 120

復讐の時間 2時間目 | 123

思想の時間 | 128

宇宙の時間 | 132

写真の時間 | 137

巫女の時間 | 141

決闘の時間 | 145

最終回 別れの時間 | 150

# 異変の時間

ドコオオオン!

ある日、そんな爆破音と共に月が破壊された。

翌朝

霊夢「あの月の異変、フランせいだと思つて来たけど、どうだかねえ」

美鈴「侵入者!?!、いや紅白巫女か、なんのようですか?」

霊夢「少しフランに用があつたから。」

美鈴「わかりました。ではどうぞ!」

霊夢「ありがとう。」

美鈴「お気をつけください、さて昼寝でも、ん?今フランの用つて言つてたよう  
な、まあ良いか!」

紅魔館

レミリア「いらつしやい霊夢。月のことなら何も関係ないわよ。」

霊夢「なんでわかるのよ気持ち悪い、じゃあ誰が、」

霊夢が考え込むと、突然床に穴が開き、落ちた。

紫「やあ霊夢！元気？」

霊夢「紫！いきなり落とすなって言ってるでしょ！」

紫「ごめんごめん；；、それはともかく、皆に集まってもらったのは他でもない、月に  
関してよ。」

よく見ると、霊夢の他に、魔理沙、咲夜、レミリア、フラン、ニトリが居た。

レミリア「あの月ね。あれ、結局誰が壊したのよ。」

紫「そねがねー；；、見た感じ黄色いたこだったわ。」

一同「たこ!？」

紫「それもただのたこではなくて、マツハ20ぐらいで飛べるのよ。」

魔理沙「とりあえず犯人はわかった。私たちはそいつをどうするんだぜ？」

紫「そいつを暗殺してもらう；；、中学生として。」

一同「；；、はあ!？」

霊夢「中学生って!？私、あまり外の世界のこと知らないわよ！」

紫「だから今から勉強する。」

一同「はあ」

そんな感じに6人の勉強会が始まった。しばらくして、以外と勉強はできていた。  
が、ここで一つの壁が；；、

ニトリ「外の世界の歴史なんて知らないよ！」

そう社会である。勉強会は20時間程で必要な基礎は終わつたが、この内の11時間が社会で消えた。そして暗殺対象がいる中学に少し地獄のヤクザの力を借りて、入学した。

紫「よし、制服も着たわね！さ、行く準備整つたわね！あ、言い忘れてたけど、幻想郷の人を誰か思ってくれば、さとりと協力してそいつを拉致ってくるわ！」

霊夢「なんと強引な、」

紫「それじゃ、スキマを開くわよ！」

紫がスキマを開き、そのたこ、もとい殺センサーのいる3—E組の校舎前に開いた。

E組

渚「今何か開いたよね！今の何!？」

殺「どうしたんですか渚君？」

渚「殺センサー！なんか外で変なのが開いて、その中から変な人達が、」

殺「そういえば今日転校生が来ますよ、6人程。」

渚「転校生か、えっ6人!？」

コンコン

殺「どうやら着いたみたいですね。どうぞ入ってください。」

6人「失礼します。(だっけ)」

殺「とうわけで皆さん。今日は転校生を紹介します;;、では自己紹介を;;、」

霊夢「はい。私の名前は博麗霊夢。えー、特技は空を飛ぶことだわ。」

魔理沙「私の名前は霧雨魔理沙。特技は魔法。」

以下、名前と能力紹介のため割愛

E組「はああ!？」

殺「ええ、こちらが新たに入る転校生です。仲良くしてくださいね!えー、席は;;、」

寺坂「こいつらの席無くねえか?」

咲夜「それでしたら、」

咲夜は紅魔館でしたように教室の空間を広げ、ついでに時を止めて机と椅子を作った。

咲夜「こちらで用意しました。」

業「おー早いねえ!どうやったの?なんか教室広がつてる気がするし。」

咲夜「時を止めて作りました。あとついでに空間も広げました。」

業「おー!凄いねえ。」

律「そのような非科学的なこと、出きるのですか?」

霊夢「できるのよ、私達が育った所はね。」



律「興味深いです。」

殺「さて皆さん。質問も良いですけど、授業を始めます。」

## 説明の時間

1時間目の授業が終わると、案の定と言つても過言ではないほど、6人の周りには生徒が集まっていた。

渚「ところでさ。君達が来る時に出たあの変な裂け目？つて何？」

霊夢「あああれ？あれはスキマっていうやつよ。」

渚「スキマ？」

レミリア「そうよ。あれはスキマ妖怪が住んでる場所に繋がる穴。移動とかにも使ってるわ。」

業「ふーん。じゃあさ。君達が育った場所の人達も連れてこれるの？」

霊夢「できるらしいけど、せつかくだしやってみるか。何かリクエストあるかしら？」

綺羅々「じゃあ妖怪なんてどうかしら？」

霊夢「妖怪、；；（妖怪かあ！幻想郷つて妖怪がたくさんいるしそういわれてもどいつ出そうか困るんだけど!?!というか元々ここには吸血鬼と河童がいるんだけど、；；まあ一旦落ち着こう。そしたらあいつにしよう。『射命丸 文』」

## スキマ

さとり「あつ、霊夢の思想から文の名前が出たわよ。」

紫「ok!じゃ、拉致りましよう♪」

紫は手慣れた手つきで文をすきまから引つ張った。

文「痛いですね紫さん!今私はネタを探してたんですよ!」

紫「なら丁度良いわ!では行つてらっしゃい!」

文「うわああ!」

紫は文を開いたスキマから霊夢たちのいる学校に投げた。

## 学校

霊夢の後ろにスキマが開き、その中から文が投げ飛ばされてきた。

文「いたたた、ここは?」

霊夢「すごいわね、あのスキマもやるじゃないの。」

殺「ほう、それが妖怪ですか。先生、初めて見ました!」

文「はい!私は妖怪の山に住む、ごくごく普通の新聞記者の鴉天狗です!」

霊夢「能力を特技として紹介しとけば。(小声)」

文「そうですね。私の特技は風を操ることです。」

業「どういう風に操れるの?」

文「えー、竜巻を発生させたり、それを止めたりと、風であれば、」

業「やってみてよ。本校舎に向けて（小声）」

文「わかりました。」

そういう文は外に出て、本校舎に巨大な竜巻を発生させた。本校舎は8分の7ほど破壊された。

業「おお！結構頑丈に出来てる本校舎をあんなにできるんだ！（覚えとこ。どこかで悪戯に使えるかもだし。）」

霊夢（これって返す場合どう思えば良いんだ？とりあえず、帰還『射命丸 文』）

スキマ

さとり「あ、文返すつて。」

紫「わかったわ！」

紫はさつきとは逆に文を掴み、スキマから幻想郷に向けて投げた。

殺「ところで、あなたたちの住んでいたところの人達はどうしてあんな凄い特技を保持しているのですか？」

ニトリ「まあなんとというか生まれつきみたいなのだよ！」

綺羅々「あとさ、妖怪つてどのぐらいいいの？」

霊夢「たくさんいるわよ。なんなら吸血鬼と河童ならその3人がそうわよ？」

E組「え？」

今日何度目かわからない驚きの後は、体育が待っていた。

## 弾幕の時間

体育の内容はいたってシンプルだった。ナイフを振るだけで、いつもの弾幕ごっこに比べてつまらなかった。

霊夢（本当に殺センサーはこのナイフと変なBB弾しか効かないのかしら？少し試してみよ）

|| || ・ビジ！

弾幕が殺センサーの腕に当たると、その腕は千切れた

E組&殺センサー&烏間「え？」

魔理沙「おー！殺センサーの腕が霊夢の弾幕で弾けたんだぜ！」

渚（これは重要な弱点かもしれない！メモしなきゃ！）

霊夢「やっぱり効いたわね！そしたら殺センサー、今から私達と勝負しましょう？」

殺「はて？その勝負とは？」

霊夢「ルールは簡単よ！これから私達幻想郷の住人が出す弾幕を20分間避け、生き残ったらそっちの勝ち。範囲はこの校庭よ！」

殺「わかりました。では始めましょう」

霊夢「じゃあ渚！スターとの合図宜しく！」

渚「わ、わかった。それじゃあよいスタート！」

先陣を切ったのは、

ニトリ「水符『河童のポロロッカ』」

ニトリだった。

殺「ぬぬ！津波？」

楓「綺麗！」

殺「このくらいなら、」

咲夜「甘いわ！ 幻世『ザ ワールド』」

咲夜の弾幕も効いた、；；、普通のナイフ型以外は。

レミリア「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

フラン「禁忌『かごめかごめ』」

さすが姉妹。見事な連携で殺センセーを追い詰めたが、脱皮によって回避された。

霊夢（よしそろそろ召喚しよ！ 『西行寺 幽々子』）

スキマ内

さとり「紫ー！幽々子だつて。あとすぐにスペルカード打てるように準備させるようにと霊夢が思ってるわよ。」

紫「幽様子召喚して、白玉桜大丈夫かしら？」

さとり「妖夢いるし大丈夫だと思うわよ？」

紫「まあたしかにそうわね！ええと、幽々供はつと、；；、いたいた。よつと！」

幽々子「ここは、スキマ？」

紫「スペルカード打てるように準備して！」

幽々子「わかったわ。；；、OKわよ。」

紫「じゃあ今からスキマ開くから、ここからスキマから出たらすぐ打って！」

### 校庭

幽々子「幽曲『リポジトリ・オブ・ヒロカワー神霊』」

霊夢「ついでに私も 霊符『夢想封印』」

殺「ぬぬぬ、さきほどまでとは違い、攻撃の密度が大きい！」

そして、殺センサーが少し油断すると、右腕が1本千切れた。そして、ラスト1分  
霊夢（よし！最後は畳み掛けるわよ！ 『ヘカーティア・ラピスラズリ』）

そうして、スキマが動き、ヘカーティアが現れた。

ヘカーティア『トリニタニアンラブソディ』」

そして、他7人も一斉にラストワードを放った。

渚「20分経過しました！」



結果は殺センサーの腕を全て千切り終わった。が、殺せなかった。

殺「はあはあ、いやはや、最後の特技、凄かったですねえ。」

霊夢「全力を放つても殺せないなんて、」

フラン「凄い！私かま全力で遊んでも壊れなかった！」

霊夢（忘れずに『帰還 西行寺幽々子』『帰還 ヘカーティア・ラピスラズリ』）

業「そういうえば今日召喚した人達は？」

霊夢「人ついていえるのかわからないけど、まあそれはおいといて、最初に召喚したのは、『西行寺 幽様子』亡霊で、特技は死を操ること。次に召喚したのが『ヘカーティア・ラピスラズリ』地獄を管理してる女神で、特徴は3つの体を持つてること。」

業「おー！風の次は死かー！、、それで殺センサー殺した方が早くない？」

6人「それだとつまらないじゃん」

業「つまらないねえ。」

## 野球の時間

渚「はあ、今日は野球か？」

業「大丈夫だよ。だってこつちには、ねえ。」

渚「ああ、そうか。たしかにそうだね！」

殺「さあ皆さん！今日はお知らせの通り、野球です！精一杯頑張りましょう。」

業「センサー、メンバーどうするの？」

殺「おっと忘れてました。先生、あまり野球の強い人はわかりませんので、皆さんと話し合って決めてください！」

E組「はい。」

休み時間

メンバー決めのため、一ヶ所に集まっていた。

渚「さて、メンバーどうする？」

業「もう幻想郷？の人達で良くない？」

E組「賛成！」

渚「じゃあごめん、霊夢さん、何か野球に向いてるような人呼んでくれない？」

靈夢「う、うん。わかったわ。」（野球ねえ、1人だけ？5人もそういう都合の良  
い奴、居るわね。『星熊 勇儀』

『伊吹 萃香』『宇佐見 童子』『古明地 こいし』そして最後に『八雲 紫』、すこし  
チートすぎたかしら。）

数秒後にスキマがひらき、5人が出てきた。

靈夢「自己紹介してもらいましょう。」

勇儀「あ？自己紹介？あー、私の名前は星熊勇儀。能力は怪力乱神を持つ程度の能  
力。」

萃香「私の名前は、伊吹萃香。能力は密度を操る程度の能力。」

以下割愛。

靈夢「まあという感じで良いかしら？」

業「良いねえ！こういうチートを期待してたよ！」

靈夢「それは良かった。ところで5人は野球のルールはわかるのかしら？」

5人「あまりわかんない。」

靈夢「まったk、」

靈夢が呆れると、咲夜が自分と5人以外の時を止めた。

咲夜「さてと、野球のルール講座を始めるわよ。しっかりと聞きなさいよ。」

5人「はい。」

3時間後

咲夜「これでわかったわよね？」

紫「わかりやすかったわ。」

それを聞き、咲夜は時止めを解除した。

霊夢「く、く、」

咲夜「霊夢、5人に野球のルールを教えたわ。」

霊夢「早！」

渚「じゃあ皆！そろそろ校庭に行こ！」

渚がそう言い、E組は校庭に向かった。

10分後

放送「それでは、野球部対E組の試合を始めます。1回表は投手野球部、打手E組で始めます。」

打順1人目は咲夜だった。

咲夜（とりあえず、向かってくるボールの時を遅めれば良いわね。）

咲夜は能力を使い、ボールを遅くした。まあ野球のルールに異能力を使ってはいけないというルールはないからね！（多分）

そして、けっかはホームランとは言わなくても、セーフになるぐらいは飛んだ。

投手（ええ、なんかボール遅くなったし、普通に打たれた;;）

2人目は童子だ。

童子（確かボールを取られるとあまり良くないんだっけ？そしたらボールをぎりぎり届かない位置に止めよ♪）

ボールは咲夜のサポートもあって遅かったが、なぜかフライだった。が、得意の超能力で、空中のぎりぎりで止めた。

A組の外野「はあ!?!なんだよあれ！」

もちろん驚かれた。

そして3人目は勇儀だった。

勇儀（とりあえず、打てばいいか。）

もちろんホームランだった。

1時間後

まだ、1回表で点数は99-0だった。無理も無い。だって、チート能力軍とただの学生の野球部エースでは話が違う。

2時間後

さすがに途中でフランが飽き、途中であえて、アウトにし、相手に回した。が、守備

も完璧だった。霊夢が空を飛び、董子が念力で地面に落としていた。そして紫が打ったときの強弱の境界を消し、打てなくしていた。

審判「えー、999対0でE組の勝ち！」

A組&野球部「ちっ！つまんな！」

## 能力の時間

それは、ある日の何気ない休み時間での会話だった。

渚「そういえば霊夢さん、君たちの幻想郷にはどんな能力を持つてる人がいるの？」

霊夢「いやあ結構バリエーションが多くて覚えきれないわよ」

神埼「そういえばレミリアさんの、『運命を操る』というのはどういうものですか？」

レミリア「字の通りよ。他人、自分の運命を変え、伸ばし、縮小し、終わらせられる」

まあ、あの殺センサーの運命はなぜかそれが出来なかつたけどね。

渚「そしたら霊夢さん！何人か幻想郷の人達を呼んで、紹介してくれない？なにか殺センサーに有効な人がいるかも！」

霊夢「まあたしかにそうわね、やってみるわ。」（殺センサーの弱点ってそもそもなにかしら、あ、あの銃弾かしら？そしたら、『清蘭』）

清蘭「紫からは話を聞いています。私の名前は清蘭。能力は、『異次元から弾丸を飛ばす程度の能力』わよ。」

業「お！弾丸によっては殺センサー殺せんじやーん。」

清蘭「それなら、『弾丸』と定義されてるものなら飛ばせませす。が、例外としてBB弾

は飛ばせません。」

霊夢「清蘭、これは飛ばせるかしら？」

清蘭「だからBB弾は飛ばせませんって。」

霊夢「でもこれは少し他のと違って、特殊なやつなんだよね。」

清蘭「まあ少しやってみます、、、、、だめですね。」

霊夢「いやあだめか〜！」（『帰還 清蘭』）

渚「他にはどんな人（？）がいるの？」

霊夢「このまま1人1人見せてくと時間掛かるわね、、、、、 咲夜、幻想郷の判明している

能力全員分書き出して！」

咲夜「は、はあ」

咲夜は時を止め、適当なところから紙とペンを取ってきて、書いていった。

### 3 時間後

咲夜「ふうやつと終わったわ。」

時止め解除

咲夜「できました。」

霊夢「おお！相変わらず早いわね！はい、渚。これを見て、気になったのを言つて。」

渚「わかった、、、、、この小野塚小町の、『距離を操る程度の能力』ってのは？」



霊夢「ああ、それね。私も使ってるのをあまり見たこと無いからわからないわね、；、少  
し呼んでみましょう。」（『小野塚小町』）

小町「紫から話は聞いたよ。私の能力は、その名の通りで、対象と対象の距離を近く  
したり遠くしたりしたりできる。これを応用させれば、ちよつとした瞬間移動もでき  
る。」

渚「その瞬間移動って、別の人とか物にもできるの？」

小町「できるさ。」

渚「そしたら銃を撃ったときに弾丸を殺センサーの所に移動させれば！」

霊夢「殺センサーを、；、殺せる！」

殺「なるほどなるほど、それは気を付けないといけないですねえ！（小声）」

## 糸成の時間

殺「はい、皆さんホームルームを始めます。席についてください。」

霊夢（なんか頭でかくなってる。）

律「殺センサー、33%ほど巨大化した頭部について、ご説明を」

殺「ああ、水分を吸ってふやけました。湿度が高いので」

殺センサーが頭を絞ること数分後

殺「さて、烏間先生から転校生のことは聞いていますね？」

魔理沙「まあぶっちゃけ殺し屋か？」

殺「律さんのときは痛い目を見ましたからねえ。今度は先生、油断しませんよ！」

以下、アニメ版と同じ流れが続くため、割愛。場面はシロが来るところからです。

がらがらがら

霊夢（なによあいつ、なんか変な服着てるわよ。）

フラン「あれが転校生？（小声）」

謎の男は手を前に出し、鳩を出した。マジックだ。

???「はっはっはっは、驚かしてすまないねえ、私は転校生じゃないよ。私は保護者だ。」

まあ白いしシロとでも呼んでくれ。」

咲夜「あの奇術、なかなかやるわね、しかも白装束ですし、殺センサーでない限り、誰でも驚くかと、」

咲夜が殺センサーの方を向く

咲夜「、、殺センサー、凄くびびってるのですか？」

殺「いや、律さんがおつかねえ話をするもので！」

ニトリ「ほう？あの生物、液化までできるのか？」

殺「このくらい、お手のものですよ！それはともかく、初めましてシロさん、それで肝心な転校生は？」

シロ「初めまして殺センサー、ちよつと性格とかが色々特殊な子でねえ、私が直に紹介します。おーい糸成、入っておいで。」

教室の後ろの壁が破壊される。

霊夢「な、なに!？」

破壊されたかべから、糸成が入ってくる。

糸成「俺は勝った。この教室の壁より強いことが証明された。」

E組「いや！ドアから入れよ！」

糸成「それだけでいい、それだけでいい。」

レミリア「またなんか変なのがきたわねえ。」

業「ねえ糸成くん、外はどしや降りの雨なのに、なんで濡れてないの？」

糸成「、、、お前は多分、このクラスで一番強い。安心しろ俺よりは弱いから俺はお前を殺さない。」

業「(にやり) いや、多分、俺よりあっちの6人の方が強いと思うけど?」

糸成「どうでもいい。俺よりは弱いから。」

6人(いや私達の方が強くない?)

糸成「俺より強い奴は、殺センサー、あんただけだ。」

殺「強い弱いというのは喧嘩のことですか? 糸成くん。力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ。」

糸成「立てるさ。だって俺達、兄弟だから。」

霊夢「はああ!? あんた達兄弟なの!？」

糸成「そうだよ。放課後、あんたを殺して、俺の強さを証明する。兄さん。」

フラン「楽しい事するの? 私も混ぜて!」

レミリア「フラン、あれは兄弟の問題だから、あんたは混ざらない方がいいわ。」

フラン「はい。」

放課後

シロ「ただの暗殺には飽きたでしょう、だからここで1つルールを決めないか？このリングの外に足が着いたらその場で死刑。どうかね？」

殺「いいでしょう。そのルール、受けますよ。ただし糸成くん。観客に危害を加えた場合も負けですよ。」

シロ「では合図で開始します。暗殺 開始！」

合図の瞬間、殺センサーの腕が千切れた。

霊夢「あれって、触手!？」

糸成の頭からは触手が出ていた。

ニトリ「糸成にも触手か。なかなか興味深いな、今度あれをモデルにした機械作ろうかな」

霊夢「良いわねそれ、私にも作ってよ」

ニトリ「まあ検討しておくよ。それはさておき、けっこうあつちは進んでるよ。」

霊夢「あ、本当（ピカーン）うわ、眩し、なによあれ、シロがやつてるじゃない。ずるいわね、こつちもなんか呼びましょ。」（光にはあいつね『サニーミルク』外に呼んでほしいわね。）

シロがいろいろと話して、

シロ「そして、献身的な親のサポート」

また光を浴びせようとシロはしたが、その光は届くことはなかった。そう、サニームの能力、光を屈折させる程度の能力だ。

シロ「な、なぜだ。」

霊夢「あんたって、妖怪とか妖精って信じるかしら？」

シロ「あまり信じてないが？」

霊夢「それなら、答えには一生たどり着けないわ。」

系成はラツシユを仕掛けようとしたが、系成の触手が弾けた。

殺「おやあ？落とし物を踏んずけてしまったようですねえ！」

渚「いつのまに!？」

殺「同じ触手なら、対先生ナイフが効くのも同じ、触手を失うと動揺するのも同じ。しかし先生の方が少し豪快です。」

ガシャーン

殺「先生の脱け殻で包んでいるのでダメージは無いはずですが、きみの足はリングの外に着いています。先生の勝ちです。ルールに照らし合わせればきみは死刑。きみは二度と私を殺れないですねえ。生き返りたいのならここで皆と一緒に学びなさい。性能計算では簡単に計れない物、それは経験の差です。きみより少し長く生き、少しでも知識が多い。先生が先生になったのはそれを君達に教えたいからです。この教

室で先生の知識を盗まない限り、先生には勝てませんよ。」

霊夢（長い長い！初めてわよこんな言ってる（書いてる）のは！）

糸成「俺は、弱い!?俺は強い!この触手で誰よりも強くなった!誰よりも!」

シロ「まずいな、糸成は大の勉強嫌いだ。勉強嫌いの子に説教すればジエノサイドが吹き上がるぞ。」

パーン

シロ「すみませんねえ先生、どうもこのこはまだ登校できる精神状態ないようだ転校初日で申し訳ありませんが、しばらく休学させてください。」

殺「ちよつと待つ;」

殺センサーはシロに触ろうとしたが腕が弾けた。

シロ「この服には対先生素材が使われてるので私には触手一本触れませんよ。」

そう言つて、シロらは帰つていった。

## 期末の時間

霊夢「五英傑―? なによそれ?」

渚「聞いてなかったの霊夢さん!」

魔理沙「なんか本校舎のA組の中でも天才な5人組らしいぜ。」

霊夢「天才ねえ。どっかの竹林の薬剤師とどちらが天才かしら?」

魔理沙「それと比べたらもともこもないぜ。」

放課後

渚「おーい、霊夢さん達。皆で一緒に図書室で勉強会するけど、霊夢さん達も来る?」

霊夢「ごめん、私達は早めに帰らないといけないから。」

渚「わかった。」

次の日

殺「皆さん、おはようございます! 知っている人も多いと思いますが、次の期末テストでA組とE組で1位の多かった方が、少なかった方に命令するというのを挑まれましたね?」



霊夢「え、そうなの!？」

殺「はい。そこで私考えました、私達が勝ったらこれをくれと命令しませんか？」

霊夢「なによそれ？」

殺「これは毎年A組が行ってる沖縄の二泊三日の夏期講習です。」

霊夢「良いわねそれ！」

業「でもさあ、あっちも本気なわけでしょ？俺達勝てるのかなあ？」

霊夢「それだったら私、必勝法思い付いたわ！」

業「へえ、どんなの？」

霊夢「簡単よ！相手のテスト用紙の問題を違うものに変えれば良いのよ。」

殺「それは名案です！しかし、採点する際大幅に答えが違っては、怪しむものもあるのではないでしょうか？」

霊夢「大丈夫大丈夫！問題は微妙に変えるから！」

業「あとはどうやって変えるか、か。」

レミリア「いや、わかったわ！『مامィゾウ』でしょ。」

霊夢「その通りよ。『مامィゾウ』は物とかを化けさせるのが得意な化け狸わよ。」

殺「おや、幻想郷の住人ですか。でも期末中はドローンが飛んでいます。幻想郷の住人がいては、また怪しむのでは？」

霊夢「その点に関しても、『ぬえ』って言うやつがいるわ。正体を分からなくすることができるわ。」

殺「では、その作戦でいきましよう。」

期末当日

霊夢（そろそろ呼んでおこうかしらね。『二ツ岩マミゾウ』『封獣ぬえ』）

スキマ内

さとり「あ、紫ー！マミゾウとぬえだつて。あとマミゾウはA組のテスト？の問題を少し変えるようにして、ぬえは自分とマミゾウを見えなくするようにしてという注文もあるわ。」

紫「わかった。それじゃ、いつも通りやるわよ。」

柵ヶ丘

先生「それではテストを始め、」

咲夜「よし、2人は来てるわね。」

マミゾウ「で、どのテストの問題を変えればいいのじゃ？」

咲夜がA組の机の上にナイフを置いた。

咲夜「今ナイフを置いた所のやつを変えてもらえればいいわ。」

マミゾウ「わかった。」

咲夜「それじゃあ私が机に着いたら時止め解除するわよ。」  
時止めが解除される。

先生「てください。」

こうして、能力による不正された試験は始まった。

### 7 時間後

先生「それでは解くのを辞めてください。」

これで全ての教科のテストが終わった。

### テストの返却日

#### E組

殺「それでは、各クラスのの1位を発表します。E組全教科1位！」

E組「まあそうだよね。」

A組担任「ええ、今回のテストの結果だが、はつきり言つて最悪だった。誰一人としてE組に勝つてゐる者はいなかった。ただし、不正はなかった。これはどういふことか説明しろ！」

学秀「先生、何故かテストの時の問題と、問題が違う気がします。」

A組担任「言い訳は結構です。」

学秀「ちっ。」

A組の五英傑以外（あーあ沖縄旅行がー！）

## 作戦の時間

その日は終業式があつた。

校長「えー、夏休み中もだらけずに、しっかりと勉強してください。くれぐれもE組みたいたいにはならないように。」

いつもはうけているというE組いじりも今日はうけが悪かつた。

数分後 E組教室

殺「えーでは、今から夏休みのしおりをくばります。」

霊夢「;;;;;、つて！なんでそんな分厚いのよ！」

殺「これでも少し足りないぐらいです。それはさておき、皆さんには夏休み中に一大イベントがありますね！」

霊夢「あー、A組から勝ち取つた夏期講習？」

殺「そうです！そこで私を殺せると良いですねえ！ヌルフッフッフッフ」

魔理沙「まあ触手8本（国数社理英1人ずつ十家庭科3人）を破壊できるから余裕だろ。」

殺「それはわかりませんよ！さて、先ほど親御さんに見せる通知表はみせました。そ

してこれは、先生からあなた達へのへの通知表です。」

殺センセーがそう言い、たくさんの紙に二重丸を描き、教室にばらまいた。

放課後 スキマ内

霊夢「ふう、1学期が終わったわねえ。さてと、そろそろ紫が来るはず、」

紫「おかえり霊夢に魔理沙、レミリアにフランに咲夜にニトリ。」

6人「ただいま。」

紫「昨日も言ったけど、今日はあの蛸を夏期講習で殺すために作戦を練るわよ。」

霊夢「見た感じ、あいつには脱皮という逃走手段あるし、そこをどう攻めるかわよね。」

魔理沙「そういうえげさ、弾幕は効くわけだろ？そしたらいろんな奴らを一気に出して

スペカを撃てば良くないか？」

レミリア「確かに前は校庭で広かったけど、今回はそれより狭いから良いかもしれないわね。」

ないわね。」

魔理沙「だろ！」

霊夢「問題はどいつを召喚するかわね。」

フラン「それなら、妖怪の山の神二体とか、閻魔とか、幻想郷には力を持った人(?)

がたくさんいるわよ。」

さとり「あ、もう作戦会議始まって？」

霊夢「始まつてるけど。」

さとり「殺センサーの心を読んで少し遅れたわ。それでなんだけど、読んで興味深い事がわかったわ。」

霊夢「どんなの？」

さとり「どうやら、あの殺センサー、『完全防御形態』ていうのがあるらしいわ。」

霊夢「完全防御形態？なによそれ。」

さとり「どうやら核弾頭の熱量すら通さない、最強の防御形態らしいわ。」

ニトリ「え、それって私が発明した兵器もか!？」

さとり「うん」

魔理沙「私のファイナルスパークもか!？」

さとり「多分」

紫「私とその固さの境界を弄ったら？」

さとり「それは、、わからないわね。」

霊夢「じゃあそれになられたら紫が境界がいじれば解決ね！」

さとり「、、確かにそうわね。」

霊夢「よし、これで対策はほぼ大丈夫わね！そしたら完全防御形態についてははたてとかに頼んでE組に皆に伝えるとして、明後日の作戦結構日に備えて、早く帰りま





## 島の時間

翌日

霊夢「、、、という感じなんだけど、どうかしら？」

霊夢ははたてを通じて伝えていた案を皆に詳しく説明していた。

業「良いと思うよ。ただ一つ質問なんだけど、どんな奴を召喚するの？」

霊夢「それはさつき話し合ってきめたわ。紹介するわ。まず、春雪異変の元凶、白玉桜のの当主、西行寺幽々子、能力は『死を操る程度の能力』 幻想郷を創設したとされる賢者の一人、八雲紫、能力は『境界を操る程度の能力』 満月を欠けさせたつきの民、『蓬萊山輝夜』能力は『永遠と須臾を操る程度の能力』 以下略（つまり、妖々虹の6面ボスとexボスを召喚するということです。なぜ紅魔郷のレミリアとフランは召喚しないかというと、2人は夏期講習に行く側だからです。また、妖々夢は藍ではなく、紫です。）

業「へえー、結構強そうじゃん。ところでさ、元のホテルスタツフはどうするの？」

業「、、、大丈夫なの？それ。」

渚「霊夢さん、僕たちも作戦を考えてるんだけど、これはどうかな？」

霊夢「どれどれ? ; ; , うん、良いじゃない! その作戦の最後の当てない攻撃の時に私達も打つとしましょう!」

渚「ありがとうございます!」

スキマ内

霊夢「ただいま、疲れた!」

紫「お帰りなさい霊夢、これで拉致するのは良いかしら?」

霊夢「大丈夫、ありがとう。」

さとり「ちよつと、このスモッグとか言う奴、出す予定のジュースに食中毒菌を入れようと企んでたらしいわよ!」

霊夢「おっそろしいわね!」

翌日

霊夢達は船に乗り、島に向かっていた。

霊夢「殺センサー、船酔いな? ; ; ?」

渚「こう見えて殺センサー、船酔いというか、乗り物酔いに弱いんです」

霊夢「意外だったわ。」

数分後

霊夢「やつと着いたわ!」( ; ; , うん! ちゃんと紫はサボらずに仕事したわね。)

ホテルには紫が呼んだ人妖神などがスタッフとして、いた。

殺「はて、何故ここのホテルスタッフ達は女性の方が多いのでしょうか？」

渚「さ、さあ？」

霊夢（目の付け所が良いわね）

しばらく歩き、外に置いてある席に着いた。

紫「ようこそ、ふくま島リゾートホテルへ。サービスのトロピカルジュースです。」

（ふっふっふっ、ついにこの蝮を殺せる時が来たわ！）

魔理沙「それにしても、ここは景色も良いし、最高だな！」

フラン「このジュースも美味しいわね！」

レミフラ（ま、血の方が美味しいけどね！）

そこから遊ぶという名目で少しずつ暗殺の準備を進めていた。

霊夢「これでかんせいだわ！」

霊夢達は全員で一緒に放つスペカを合同製作していた。

白蓮「私達はこれを当てないようにならば良いんですね？」

ぬえ「いつもと違って当てないからな、ややこしいな。」

霊夢「まあがんばりましょ。」

そして、そしてさその時は少しずつ近づいて来た。

## 決行の時間

夕食時

霊夢「ちよつと殺センサー！日焼けしてるじゃない！」

殺「そうですねえ。ですが、この黒い皮を脱ぎ捨てれば！ほら元通り。」

魔理沙「出た！月に一回の脱皮なんだぜ！」

殺「こういう使い方もあるんですよ。本来はヤバイ時の奥の手ですが、ふんにやあああ！」

霊夢「なんでこれからヤバイ時が来るのに脱皮使うのよ。」

1時間後

殺「さて、一体何をしてくれるんですかねえ！」

悠馬「まずは三村が編集した動画を見てもらって、その後にテストに買った7人が触手を破壊し、それを合図にみんなが一斉に暗殺を始める。それで良いですかね、殺センサー」

殺「ニユルフフフフフ。上等です。」

創介「セツティングごころうさん。三村。」

航輝「頑張ったぜえ。皆が飯食ってる間もずっと編集さあ。」

魔理沙（口調が少し似ているんだぜ!?!）

殺（このチャペルは周囲を海で囲まれている。壁や窓には対センサー物質が仕込まれている可能性もある。脱出はリスクが高い。チャペルの中で避けきるしかないようですねえ。）

渚「殺センサー。まずはボディチェックを。いくら周囲が水でも、あの水着を持ってたら逃げ切れるからね。」

殺「入念ですね。そんな野暮はしませんよ。」

大河「始めるぜ。殺センサー。」

魔理沙（；；、またなんだぜ（；；ω；；））

テレビ「AC；；、櫛ヶ岡中学校3年E組。あろうことか、ここの担任教師は暗殺対象である。」

殺（後ろからE組きつてのスナイパー、速水さんと千葉君の匂いがありますねえ!）

殺「それにしてもこの動画よくできている。編集とナレーターが三村君ですか。選曲といい、カット割りといい、良いセンスです。ついつい引き込まれ、にゅ?」

テレビ「われわれ調査隊に極秘情報を提供させてもらった方々にお越しいただきました。話を伺う前に続きをご覧ください。」

その後、1時間精神攻撃

殺「死にました。先生死にましたあ。あんなの知られて先生もう生きていけませえん。」

テレビ「さて、極秘情報にお付き合いただいたが、何かお気づきではないだろうか、殺センター。」

殺「水が!?!誰も水をまく気配なんて無かったはず!まさか、満潮!?!」

霊夢達視点

律「53秒経過!一斉射撃を開始します!」

東方組「殺符『殺意の神隠し』」

53秒で、チャペルは弾丸の飛び交う土地へと変わった。時は止まり狂い、スキマが弾を移動させ、不死の炎が飛び散ったりと、カオスと呼べるような状態でもあった。

渚「そして、トドメの二人!陸の上のは二人の匂いが染み込んだダミー!室内と陸上を警戒させておき、フィールドを水の檻に変えることで、まったく別の狙撃点を作り出す。」

律「ゲームオーバーです♪」

パンパーン

殺「よくぞ、、、ここまで!」

バーン

渚「うわっ！」

紫「すっごい爆発！皆は大丈夫なのかしら。」

霊夢「大丈夫だわ。」

紫「それなら良かったけど、」

殺「ブクブクブクブク、ふう。」

渚「なにあれ？」

霊夢「完全防御形態。どんな攻撃も通さない、殺センサーの2つ目の奥義わよね？  
殺センサー。」

殺「そうですが、話したことも無いはず、」

霊夢「幻影郷には心を読む奴がいるのよ。」

殺「はあ、」

霊夢「あと、境界を操る奴もね。」

殺「それはどういう、」

殺センサーの体がもとに戻った。

殺「ぬぬ!?なぜ!」

紫「通常形態と完全防御形態の境界を無くしたから、完全防御形態の存在が無くなっ

たのよ。」

殺「あなたは!？」

紫「申し遅れたわね。私の名前は八雲紫、幻影郷を創設に携わった一人、妖怪の賢者でもあるわ。」

E組「幻想郷を創設したああああ!？」

紫「そう。つまり超実質的にこの子達（東方組）の母親的な感じよ。」

渚「それなら、僕達を幻想郷に連れていけるの?」

紫「行けるけど、生き残れるか分からないわよ?、霊夢、この後どうする?」

霊夢「そうわねえ、殺センサーの触手も回復したし、今日は諦める?」

業「まあ確かにねえ。」

紫「じゃ、今日は諦めるって言う感じ良いかしら?」

E組「、うん。」

フラン「私達、明日は遊んで良いの?」

霊夢「良いわよ。」

フラン「やったあ!」

幽々子「ねえ紫、私達も遊ばない?」

紫「、、、、まあそうね。たまにはのんびり遊ぶのも良いわね。人数は多い方が良いだ



ろうし、何人か呼ぼうかしらね。」

## 遊びの時間

前回から10分後のホテル

霊夢「そういえばさとり、食中毒菌のやつ親玉、わかった？」

さとり「わかったわよ。親玉とそいつがいる場所もね。」

紫「もししたら暇だし、そこに行きましょう。」

霊夢「連れてくのは、今ここにいる幻想郷のやつらで良いわね。」

ちなみにここにいる幻想郷組は、霊夢 魔理沙 咲夜 レミリア フラン ニトリ

紫 さとり こいし 紅魔館組 妖夢 幽々子 早苗 神奈子 諏訪子です。

霊夢「じゃ、ちよつと殺センサーに許可とつてくるわ。」

1分後

霊夢「とつてきたから行きましょ。」

10分後

さとり「ここだわ。」

霊夢「とりあえず入るわ。」

紫「霊夢、ちよつと待って！」

霊夢「なによ紫。」

紫「だいたいボスにわ手下がいるじやない？そいつらを先に処理したいから、普通に入らずに；；；；、フラン、あそこの中のカメラと警備システムを全て破壊して！」

フラン「わかつたろ。キュットして、どかーん！」

カメラと警備システムが全て爆破し、しばらくして中にいた人が外に出てきた。

霊夢「結構派手にやるじやない。」

紫「このぐらいやらないと♪さ、入りましょう。」

一行は入っていった。一方

鷹岡「何事だ!?全てのカメラとの通信が途絶えた!調べてこい！」

殺し屋二人「へーい。」

一行

霊夢「それにしてもだたっ広いわねえ。」

紫「ここを攻略したら幻想郷に建物を持つていくのもありわね。」

????「お前らはだれぬ？」

さとり「私の名前はさとり。あんたは；；；、名前はグリッブ。主に素手の握力を使って

人を殺めるみたいね。」

グリッブ「なぜそれをぬ？」

霊夢「といつかなんで『ぬ』を付けるの。」

グリップ「侍っぽくてかつこいいではないかぬ。」

霊夢（そうかなあ。）

グリップ「とにかくボスからの指令で怪しい奴を始末するように言われてるから、今からお前らを始末するぬ。」

一行（めつちやめんどくせえ！）

グリップ「さあ誰からでもかかってこいぬ！」

紫「もしたらここに来た鬼からでいいかしら」

スキマから伊吹萃香を取り出す。

萃香「え、ここはどこ!?!」

グリップ「そいつが鬼ぬ？随分弱そうぬ。」

萃香「なんだお前！初対面の人に悪口とは！もう起こった！本気出す。」

グリップ「かかってこいぬ。」

萃香「ああ良いよ、その前に。」

萃香は霧となりグリップの後ろに移動した。

萃香「この道具は没収ね。」

グリップ「なぜそれをぬ！」

萃香「バレバレだったよお。」

グリップ「ふん！」

グリップは萃香の手を掴んだが、その手は霧となり逆にグリップが掴まれた。

グリップ「そいよつと。」

グリップを萃香が投げ、気絶した。

萃香「あ？もう気絶したか。つまんねえなあ！」

紫「ありがとう。もう帰って良いわよ。」

萃香「まったくなんだっただ。」

パチユリー「この握力の強さ、興味深いわ。持って帰って良いかしら？」

紫「まあ、；、良いじゃないかしら。」

グリップ「じゃあスキマを図書館に繋いで。」

紫「はいよ。」

霊夢「さあ、進むわよ。」

数十分後

レミリア「こんな劇場にも誰も居ないわねえ。」

妖夢「真つ暗なので半霊も反応しないですね。」

美鈴「あの、あそこに人影があるのですが、；、；、」

咲夜「珍しく門番として役に立ったじゃない。」

美鈴「いやあ気を感じたので。」

幽々子「どうかあいつ銃を舐めてるじゃない!!」

????「ざつと17人ぐらい、か。言っておくがここは完全防音だ。撃つても誰も助けに来ねえよ。」

さとり「あいつの名前はガストロ!銃を使うわ!」

ガストロ「そこか!;;, ってなんで銃がナイフになってるんだよ!」

咲夜「あらあら、お探しの銃はこれ?」バーン

ガストロ「あ、足が;;,」

霊夢「今のうちに行きましょ。」

数分後

霊夢「ここが最上階ね。」

??「お前らは一体誰なんだ?」

さとり「うわ!スツゴい憎悪!何かあった?鷹岡さんよ。」

鷹岡「何の目的で菌を入れるのを妨害して何のためにカメラを壊してなんで俺が雇った殺しや達を意図も容易く倒したんだよ!」

霊夢「そりゃあ何か悪い計画は阻止しなければならぬし、カメラがあつたら邪魔だ

し、私達はあんたらより油断ができないところに住んでるから必然的に強くなるのよ。」  
諏訪子「そもそも種族が違うもんね。」

鷹岡「ムカつく奴らだ！せつかくあの蝮を殺そうとしたのにお前らのせい！絶対殺してやる！」

フラン「ねえ、これ私が相手して良い？」

霊夢「別に構わないけど。」

鷹岡「このナイフで勝負しようぜ。」

フラン「キュットして、どかーん！」

鷹岡「な、ナイフが；；」

フラン「そんなものよりも鬼ごっこしようよ。私が段幕出すからそれからそつちが逃げてよ。断ったら壊すよ。」

鷹岡「そんなものやるか；；」ドガーン

フラン「間違えて奥のヘリコプター壊しちゃった。次は間違えないけどどうする？」  
鷹岡「；；、わかったよ。」

フランス「じゃっ、決まりねそれじゃあ始めよ！コンテニュー無しの鬼ごっこを！」

禁忌『フォーオブアカインド』

フラン a 「禁忌『レーヴァテイン』」

フラン b 「禁弾『過去を刻む時計』」

フラン c 「秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

フラン d 「QED『495年の波紋』」

鷹岡 「な、なんなんだよこれ;」

鷹岡は全ての弾幕に当たり消滅した。

フラン 「なーんだ。すぐに壊れちゃった。」

霊夢 「あっけないわねえ。」

早苗 「それじゃあ早く帰りましょう!」



## 恐怖(?)の時間

渚「肝試し?今からですか?」

殺「ええ!夏の夜にやることと言ったらこれでしょう!」

業「殺センサーが遊びたいだけなんですよ。」

霊夢「そもそももう妖怪がそこにいるわけだし、肝試しなんて日常的な感じだしねえ、」

紫「良いじゃないの!ぜひやりましょう!」

霊夢「紫!」

殺「そうでしょう!そうでしょう!でわ皆さんの参加で良いですね!」

霊夢「まあわかつたわよ。」

魔理沙「良いんだぜ!」

紫「良いけど、一つ提案があるわ。」

殺センサー「その提案とは何ですか?」

紫「私達妖怪も驚かす側について良いかしら?」

殺センサー「構いません。ぜひお願いします。」

紫「任せてちょうだい。」

さとり(どうやらカプル成立の目的もあるようだけど、まあ面白そうだし言わなくて良いわよね。)

さとり「お憐、空も行くわよ。あとこいしも」

3人「らじやー。」

殺「場所はこの島の海底洞窟。出口まで男女ペアで抜けてください。」

霊夢「質問なんだけどささ、女子の方1人多くない？」

殺「したら余った場合ジャン負けが1人で来てください。」

霊夢「了解。」

霊夢、早苗、魔理沙以外の東方組は殺センサーと共に洞窟へ行った。(捕捉・咲夜はレミフラと一緒にきました。早苗は肝試しに参加したかったため残りました。前回の妖怪に加え、新たに小傘、お空、お憐、ぬえ、白蓮、一輪、雲山、こころを紫が呼び出しました。)

渚「ところでさ、さつき紫さんが呼び出してたのって妖怪？」

霊夢「そうよ。それぞれの説明はさ、見てからのお楽しみで良いわね。」

業「まあ先に仕掛け知っちゃってたら肝試しの楽しみ無くなっちゃうもんねえ。」

霊夢「それはそれとして、早くじゃんけんしましょ。」

女子「最初はグー、じゃんけんポイ」

霊夢「；、私の一人負けね。じゃ、先に行ってるからペア組んでおいてね。それじゃあ行ってくるわ。」

霊夢は洞窟に入っていった。その瞬間影から

小傘「わー！驚けー！」

霊夢「；、相変わらず下手ねえ。」

小傘「（、ω、）」

霊夢「まあそれ知らない人ならまあまあ効くと思うわよ。」

小傘「（、ω、）」

霊夢「さてと進みましょう；、て！なんでここにこれがあるのよ！」

霊夢の前にはいつも見てきたあるものがあつた；、博麗神社である。

霊夢「どうせ紫とかの仕業でしょ！あのスキマめ！」

すると霊夢の肩を誰かが突つついた。

霊夢「まったく誰よ。」

こころ「ばあ！」

霊夢「わあ！驚いた！般若被るなんてずるいわよ！」

こころ「やった。驚かせなれた。」

霊夢「そういえば殺センサーはどこにいるのかしら、；； いや、いたわ。神社の屋根の裏の橋で怯えてるわ。まったく。肝試し提案者なのに。」

そこからしばらく歩き、出口にたどり着いた。

カエデ「きやー！ー！」

霊夢「意外と驚いてるわねえ。」

数分後

殺「さて皆さん、どうでしたか？先生あまりにおつかなくて、；；」

小傘「久しぶりにお腹一杯！」

## 祭りの時間

## 博麗神社

霊夢「3日間ぐらい空けちやったから落ち葉が溜まつてるわね。」

霊夢が落ち葉を集めているとき、突然真下にスキマが開いた。

霊夢「・・・え？うわー！」

紫「そんなに驚かなくても良いじゃない。」

霊夢「突然何よ！」

魔理沙「そうだぜ！なんでE組出張組を集めたんだぜ!？」

紫「それがさつき殺センサーがね、」

さつき

殺「、、というわけでなんとか人を集めてくれませんかねえ？」

紫「わかったわ。その祭りとやらを夏休みの最後にやるのね。何人ぐらい集めれば良

いかしら。」

殺「そこは自由で構いません。」

紫「わかったわ。」

殺「では私はこれで。」

現在

霊夢「ふうん。それで私達を連れてきたのね。」

魔理沙「それじゃあ行くのはこの6人妖なのか？」

紫「いや全員連れて行くつもりだけど、」

ニトリ「それ大丈夫か？私が言うのもなんだけど、妖怪の山の連中とか厄介なやついるけど。」

紫「その点は安心してちょうだい。私がスキマから見てるから。」

霊夢「そしたら藍と橙はどうするのよ。」

紫「あの子達ならきつと大丈夫わよ。」

霊夢「本当かしらねえ。」

夜

スキマから大量の人妖神等が出てきた。

霊夢「紫も良くやるわね。人の居ない所にスキマを出すなんて。」

数分後 魔理沙視点

魔理沙は辺りを散策していた。すると射的屋台が見えてきた。

魔理沙「これはなんだぜ？」

おじさん「これはね、このオモチャの銃であそこにある景品を撃ち抜くゲームだよ。」  
魔理沙「やるんだぜ！」

魔理沙は紫から貰った、『紫特性金湧き財布』（オリジナルマジックアイテム）からま  
300円を取り出した。

魔理沙（少し魔力を込めて、えい！）

銃から出た弾はミスイルとなり、景品を全て落とした。

魔理沙「やったんだぜ！」

おじさん「こ、これが景品、ね。」

魔理沙はおじさんから3つの袋に詰まった景品を持った。

チルノ、ローレライ、清蘭、鈴瑚視点

4人は並んで屋台をやっていた。

チルノ「あたいかき氷おいしいのよ！1杯えーと、あ100円だよ！」

ローレライ「八つ目うなぎはいかがー！歌のサービス付きで1本300円だよ！」

清蘭「お団子、つきたて1本300円だよ！」

鈴瑚「おいしいお団子1本250円だよ！」

チルノの1杯100円のかき氷は大繁盛し、ついでにその隣の3件の屋台もまあまあ  
繁盛した。

早苗、諏訪子、神奈子視点

3人神は祭りのやぐらの上で布教をしていた。

早苗「私達を信仰すればきっと奇跡は訪れます！ぜひ私達を信仰し、奇跡を体験してみてください！」

数分後、3人神はやぐらから降ろされたが、まあまあ信仰は集まった。

そうして幻想郷の住人達は夏祭りを楽しんだ。



## 料理の時間

カエデ「シルバーウィークなのに皆に集まってもらったのは他でもありません。全国で供給過多になり出荷されず、廃棄処分になつてゐる門弟です。」

咲夜「あああれね。あの卵、うちの妖精メイドが美味しく食べてるわよ。」

レミリア「えそうなの!？」

咲夜「はい。最近外の世界に来ることが多いので、時々引き取つてゐるんです。」

カエデ「ですが、まだまだ廃棄される卵はあります。そこで！廃棄される卵を救済し、なおかつ殺センセーを暗殺できるプランを考えました！」

E組「おお！」

霊夢「食べ物を使う。ねえ。」

竜馬「け、飯作つて、これ中に混ぜるんだろお、そんなもんすぐに見破られるつづの」

カエデ「ふふん！もう少し考えてるのだ。烏間先生にお願いして下準備OK！」

烏間「ああ、既に準備は校庭で、」

カエデ「それじゃあ皆さん、校庭へ！」

校庭

霊夢「……、なによこれ。」

カエデ「これは巨大プリンを作るのに必要なの。名付けて、プリン爆殺計画！」

霊夢「プリン？」

カエデ「そっか、そっちにはプリンがないのか。それじゃあ説明するね。」

説明中

3時間後。

霊夢「わかった！わかったから！」

カエデ「分かればよろしい。そして、このために殺センサーから重要な供述を得ていきます！」

昨日

カエデ「プリンっていくらでも食べられるよね殺センサー！」

殺「ええ、まったくそうですね！いつかでつかいプリンに飛び込んでみたいですねえ！ま、お金無いから無理ですけどね。」

現在

カエデ「ええ叶えてあげましょうその夢とロマン！ぶっちゃけ私も食べたい！」

計画説明中……

レミリア「ふうん、良いわねそれ。」

カエデ「でしょ！それじゃあこの計画に使うこれを疲労しましょう！」  
布が取れる。

ニトリ「おお！機械っぽいじゃないか！これが終わったら改造して良いか？」

カエデ「まあ良いよ。」

準備中

カエデ「この型に入れる溶き卵は既にマヨネーズ工場から用意済み。ですが残りは政府協力の元、私達にかかっています。」

霊夢（久しぶりに出そうかしらね。たしかこれってスイーツわよね。それなら、『茨木

華扇』

型の前にスキマが開いた。

華扇「ここはどこかしら？」

華扇は後ろを向く。

華扇「この形、もしかしてプリン!? しかもこんなに大きくない！食べてみたいわ！」

霊夢「か、華扇？」

華扇「あ、何の用なの？」

霊夢「プリン作ってほしいのよ。あんたなら詳しいと思つて。」

華扇「良いわよ。」

霊夢「助かるわ。」

華扇「まず溶き卵と牛乳、砂糖を混ぜて、；；」

翌日

華扇「そしたらこれで」

カエデ&華扇「完成ね！」

E組「やったー！！」

数分後

殺「はわあああー！こ、これ全部先生が食べて良いんですか!?!」

カエデ「え、ああうん。廃棄卵救いたかっただけだから。」

莉桜「茅野ちゃんが考えたんだよ。」

殺「茅野さん、；；」

レミリア「それじゃ、私達は英語があるから。」

フラン「また廃棄にならないように全部食べてね！」

殺「もちろんです！ああ夢が叶った！いただきまあす！」

廊下

霊夢「凄い勢いで食べてるわねえ！」

魔理沙「幽々子でもあれはきついんじゃないか？」

殺「ふう、少し休憩。プリンの中にわずかに異物混入を感じとりまして。カラメル、プリン、土と食べ進めまして取り外して来ました。爆破装置は竹林君が？ 爆裂の計算は見事でしたが、プラスチック爆弾の独特の匂いに先生気付いてしまいましたあ。今後、匂い成分にも気を付けてください。そして、皆で作ったプリンは皆で食べるべきです。さあ、綺麗な部分を取り分けて置きました。もちろん、お客様の方も。」

華扇「やったー！」

こうして、E組+αはプリンを幸せに食べた。

## 事件の時間

霊夢「昨日見回してたから行けなかったし、今日は行かないといけないのに！大幅に寝坊したわ！早くしないと！」

紫「遅いわよ霊夢！」

霊夢「早くスキマを！」

紫「はい！」

紫がスキマを開き、霊夢達が校舎に向かった。

魔理沙「間に合ったんだぜ！」

レミリア「間に合ったのはいいんだけど、おかしいわね。教室に誰もいない。」

霊夢達の後ろにスキマが開く。

さとり「その件だけど、職員室にいるわよ。」

霊夢「どうして？」

さとり「あの殺センサーがなにかわからないけど、盗んだらしいのよ。でもそれは生徒の心を読んで推測できること。」

魔理沙「それじゃあ殺センサーのを読んだらどうなるんだ？」

さとり「それが、どうやら殺センサーは盗んでないらしいのよねえ。」

業「ふうん、そうなんだあ。それじゃあ、殺センサーの言い分が正しいの？」

霊夢「あ、皆いつのまに來たのね。」

さとり「そうよ。この素晴らしい能力の心を読む程度の能力を持つ私が言うんだから間違いないわ！」

渚「その能力の凄さはわかったけど、それ」それが本当かわからないよね。過去に行つて確かめられたら良いのに。でしょ？」被せてこないでよ、」

さとり「まったく失礼しちゃんわねえ。」

魔理沙「でも過去に行くなんて、いや、紫なら行けるか？」

紫「読んだ？」

霊夢「あなたの能力の応用で過去に行けない？」

紫「行けるわよ。」

さとり「そしたらさ、昨日の高度1万m辺りに繋いでくれる？」

紫「任せてちょうだい。」

紫は昨日の高度1万mとスキマで繋いだ。

霊夢「、、、なんか凄い移動してるけど、何やってるの？」

殺「これはポテトを振ってました。」

さとり「;;, これは本物ね。それじゃあ次は????? マンションの??????? 室のベランダにばれな  
いように開いてちょうだい。」

紫「了解。」

開くと盗みをしている場面が写された。

E組「!?!」

さとり「安心して頂戴。これは偽物だわ。だつて、『これはあいつからの命令これはあ  
いつからの命令これは;;,』と思つてるからね。」

紫「そしたら今のこいつの居場所に繋ぐ?」

霊夢「お願い。」

紫「OK!」

まだ繋ぐ。

シロ「な、なんだこれは?」

霊夢「あんたは!」

カエデ「あ、あの人、烏間先生の部下の人!」

皆がスキマに入る。

シロ「ちつ、またお前らか!もう良い!系成行け!」

そう言うのと触手を改造された系成が出てきた。



糸成「殺センサー、あんたは俺よりも弱い。」

魔理沙「恋符『マスタースパーク』」

一筋の光線が糸成を貫き糸成は気絶した。

霊夢「ちよつと魔理沙!?!」

魔理沙「すまんすまん、無意識に出たんだぜ。」

糸成が急に頭をおさえ悶え始める。

糸成「あ、頭が痛い!;;, 脳みそが、裂ける;;, !」

シロ「度重なる敗北のシヨックで触手が精神を蝕み始めかあ、ここいらがこの子の限界かなあ。」

霊夢「紫、永琳を!」

紫「わかつてるわよ。」

スキマが開く。

霊夢「永琳!どんな頭痛にも効く頭痛薬できる?」

永琳「材料さえあれば!」

紫「それっぽいのならあるわよ。」

永琳「どんびしゃ!作ってくるわ!」

数秒後

永琳「できたわよ！」

霊夢「それをあの子に！」

永琳「了解！」

永琳が薬を飲ませると、糸成は回復した。それと同時にどこかに逃げた。

殺「待つてください糸成くん！皆さんも追いましょ！」

E組「うん！」

## 追跡の時間

一行は数グループに分かれ、飛び出した糸成と、ついでに逃げたシロを追っていた。霊夢「空から見ても見つからないわねえ。」

紫「萃香にも頼んでるんだけどどうかしら？」

魔理沙「まああいつより人探しに適した能力なんて少ないからな。」  
バーン

幻想郷組が空から探しているとき、突然爆発音がした。

にとり「なにごとだ!？」

紫「行ってみましょう。」

幻想郷組は飛んでいった。そしてそこには悲惨にも破壊され、火事になった建物があつた。

紫「酷いわね。」

霊夢は店員にながあつたかを聞いた。

店員「なんか白髪の少年が入店してきて、急に暴れだしたの。」

霊夢「その少年の髪に特徴ってありましたか？」

店員「気持ち悪いぐらいにうねうねと動いてたかなあ。」

霊夢「ありがとうございます！」（間違いない。糸成の作業だわ。）

紫「どうかしら？」

霊夢「糸成が近くにいるかもしれないわ！」

魔理沙「まじか！早く萃香呼ぼうぜ！」

紫「いや、その件なんだけど、きつと霧となつてさがしていて、呼び出そうにも呼び出せないのよ。」

魔理沙「それはさ、ほら紫の能力で、」

紫「その手があつたわね。」

紫は能力を使って霧の萃香を目の前に出した。（というか集めたのほうが正しいかもしれない。）

萃香「なんだい急にどうした？」

紫「あなたの能力でここら辺の人を集めてくれないかしら？」

萃香「わかった。」

萃香は能力を使って人を集めた。

数分後

人が集まつてきたが、一向に糸成は現れる気配が無い。それどころか、

渚「これはなんの集まりなんですか？」

殺「さあわかりません。」

他のところを探していたグループが来ていた。

霊夢「そもそもあいつ人なの？」

紫「さあ？」

数時間後

辺りが暗くなり始め、レミフラが日傘が不必要になったころ、

霊夢「糸成やつと来たわ！」

糸成が現れた。

咲夜「；；、おかしいわ。触手の色が変わだわ。」

糸成の触手がすっかり変色していた。

霊夢「；；、永琳の頭痛薬の影響かしら。ほらあの頭痛の原因つてあの触手じゃない。

永琳の頭痛薬つて原因を滅ぼしそうじゃない。」

幻想郷「確かに。」

そして萃香が能力を解除し、人々が帰ったとき、糸成は完全に触手が消え、倒れた。それと同時に律が糸成の過去の調査が完了した。

寺坂「けつ、つまんね、こんなんであつただけかあ、；；、皆それぞれ悩みあるんだよ！」

重い軽いはあるんだろうが。俺らのところでこいつの面倒見させろや。それで死んだらそれまでだろうが。」

寺坂が糸成をどこかに連れていったとき、夜のだから幻想郷組は帰った。

翌日

殺「気分はどうですか？」

糸成「最悪だ、力を失ったんだから。でも弱くなった気はしない。最後は必ず殺すぞ。殺センセー。」

## 技術の時間

糸成が加わったことにより、E組の技術力が上がった。その一例が戦車のラジコンである。

霊夢「あら糸成。何やってるの？」

糸成「見ての通りラジコンの戦闘車だ。昨日一日あの蛸に勉強漬けにされてストレスが溜まってな。これで必ず殺してやる。」

にとり「えっ！それ機械じゃないか!？」

そして幻想郷にも技術者はいる。それが河城にとりだ。妖怪の山で発明をしている彼女と糸成が出会ったら何が起こるのか？答えはそう、

にとり「私も手伝って良いか!？」

糸成「ああ、良いさ。」

高めあいである。

にとり「今日は少し遅くなるって紫に伝えてくれないか？」

霊夢「わ、わかったわ。」(機械のことになると燃えるんだから、)

霊夢は教室から出ていき、スキマから帰っていった。

にとり「さてと始めようか。まず今はどんな感じ？」

糸成「今はこのコントローラーでラジコンを操作できるように調整してる。」

にとり「なるほどねえ。やっぱり外の技術は凄いなあ！勉強になる！」

糸成「もしたらあんたはここのはんだ付けとこここの接続、あとは新案の提案をできるか？」

にとり「任せてよ！とりあえず防水機能と水陸空対応してみたいな。とりあえず頼まれたことをするよ。」

数時間後

だいたい完成した。

にとり「おおよそ仕組みと作り方が分かった。あとはもう少し改造して良いか？」

糸成「ああ構わない。」

にとり「よおしやるぞお！」

夜明け後

にとり「できたあ！」

糸成「これで終わりか。」

にとり「うんこれで満足だよ！まず3種の弾（ミサイル型、追尾型、通常型）の選択可能な砲弾！平原から体内までお手のもの！小型高性能カメラ！タイヤを変形させる



ことで可能にした水陸空対応！その他にもたくさん機能が搭載！そして一番の目玉が！」

糸成「対先生用BB弾製造装置だろ。」

にとり「その通り！」

糸成「それじゃあ早速試運転だ。」

2人はしばらく試運転をした。結果は、合格だった。

にとり「よっし！そしたら殺センサーが来たときに投入しよう！」

糸成「わかってる。ふぁーあ、少し眠いな。少し眠る。」

にとり「わかった。私は妖怪だから大丈夫！」

#### 4時間後

魔理沙「まだ眠いぜ、；、つてにとり居たのか！」

にとり「昨日徹夜でこれを仕上げたからね。」

レミリア「少しは夜の内には寝ないとだめよ？」

霊夢「あんたが言えることじゃないでしょ。」

#### 数分後

殺「では、ホームルームを始めましょう。」

渚「起立、気を付け、礼！」

銃撃が始まり、ラジコンからミサイルが発射される。

殺（おや？見られない弾というかミサイルがありますね。）

殺センチーは手で退けようとしたが、手が弾けた。

殺「な!？」

にとり「よし！大成功！」

糸成とにとりはハイタッチをした。

## 体育祭の時間

ある日

殺「ええ皆さん、明日は体育祭です。ええE組ですが、幻想郷の人達は各種目一人まですます。」

業「なんで？」

殺「だって幻想郷の人達強くてつまらないじゃないですか。ただし棒倒しは別です！  
磯貝君の退学が懸かってますからね！」

霊夢「あんた何したのよ！」

悠馬「まあちよつとね。」

そして、体育祭当日。

霊夢「へえ、運動会つてこういう感じなのねえ；；；」

殺「そういえば初めてですよね？」

霊夢「そうだけど？いやあ私達の幻想郷にこんな無かつたからねえ；；；」

殺「そういえば、レミリアさんとフランさんは日光は大丈夫なんですか？」

霊夢「今更ねえ。日光を遮る特殊なクリーム塗ってるから大丈夫よ。」

渚「おーい、もうすぐ第一種目始まるよ！」

霊夢「たしか第一種目って二人三脚だっけ？二人で一緒に走るっていう、」  
殺「そうですね。」

霊夢「たしか出場するのは、」

ラピスラズリ「私だわよん！」

霊夢「そうそうあんたね。、、、、、やっぱり一人で二人分やるのね、、、」

ラピスラズリ「当たり前じゃない！」

霊夢「なんの当たり前よ、、、、、あと他は、、、、、もう集まってるわね。」

そして第一種目の二人三脚が始まった。

殺「あのお、あれって2人じゃないですか？」

霊夢「いや、あれで一人なの。『3つの体を持つ程度の能力』でね。ああ見えても神様だからねえ。」

業「へえ、あれで神様ねえ、変な服。」

霊夢「でも月、地球、異界から信仰集められるからあれが強いのよねえ、、、」

そして、ヘカーティアが走った途端、地響きが起こった。

霊夢「ああ、あれ本気で走ってるわね。」

そしてぶつちぎりで1位だった。

ラピスラズリ「どうかしら?」

霊夢「本気出しすぎよ!」

そこからしばらく、幻想郷組による圧倒的な力でどんどんと点差を開き、ついに2位と500点差になったとき、最後の種目の棒倒しになった。霊夢は聖白蓮、星熊勇儀、二ツ岩マミゾウを呼び出した。

霊夢「よし、これで良いわ! さ、マミゾウ、やっておしまい!」

マミゾウは白蓮と勇儀の見た目を男子にし、棒倒しに参加できるようにした。

勇儀「ぶっ倒してやる!」

白蓮「久しぶりに本気出しましょう。」

スタートの合図と同時に勇儀は走りだし、白蓮は魔神経巻で、素早さと力を強化してから走りだし、棒を2人で殴り、棒は吹き飛んだ;;、校外まで。

放送「ゆ、優勝はE組!」

E組「やったあ!」

片付け時

霊夢「あれ? ヘカーティアと白蓮と勇儀と依姫(障害物競走で出場)は?」

レミリア「ああ、あのA組の外国人が理事長に殺される運命が見えて、面白そうだからマミゾウにその4人に化けさせて理事長部屋に行かせたわ!」

理事長部屋

既に理事長がぼこされていた。  
勇儀「なんだ弱！」

# 謝罪の時間

## 保護施設

霊夢「で、なんで私達まで、」

レミリア「しょうがないじゃない。昨日の夕方E組やつがこの園長に怪我させたんだから。」

霊夢「まあそうだけど、てか夜凄いわね。」

レミリア「まあ普段からフランの世話してるからね。」

霊夢「あいつの能力便利すぎない？」

そこである子が言った。

子供「で、なにやってくれるわけおたくら、急に押し掛けてくれっちゃって、減った酸素分の仕事ぐらいは出きるんでしようねえ？」

E組「なかなかとんがつてる子もいらっしやる。」

園児1「やべえ桜姉さんがご機嫌斜めだ！この兄さんち殺されるぞ。学校の支配を拒み続けること実に2年！」

園児2「エリートニートの桜姉さんに！」

霊夢「そんなかつこよく言う？」

渚「要するに不登校だよね？」

桜「まずは働く根性あのかどうか試してやろうじゃないの！」

床が壊れる。

園児3「あーあの床はだめなのに。」

悠馬「修繕はしないんですか？その、この建物、老朽化ぎかなり、」

先生「お金が無いのよ。うちの園長、待機児童や不登校児がいれば片っ端から格安で

預かってくるから。職員すら満足に雇えず、本人が一番働いてるわ。」

陽斗「33人に幻想郷、そして2週間か。なんかいろいろできるんじゃない？」

寿美鈴「うんできるで！」

悠馬「よしみんな！手分けしてあの人の代わりをつとめよう！まずは作戦会議だ！」

E組「おおー！」

数分後

霊夢「おお！結構劇本格的ねえ！そういうえば咲夜は？」

魔理沙「あつち<sup>出し物</sup>側だぜ。」

霊夢はまた窓から中をみた。すると劇は終わっており、咲夜が立っていた。

咲夜「さあ皆さん、この帽子に種も仕掛けもありません。触ってみてください？」



そう言つて咲夜は園児達に帽子を渡した。

咲夜「ありませんね？この帽子に、えい！このように呪文をかけるとなんと!?!?!」

咲夜は時を止める。

咲夜「さてと、手軽そうな車は、あつたわ。これ持ち上がるかしら、あ意外と軽いわね。持つていきましよう。」

咲夜は車の空間を少し小さくして車自体を小さくし、逆に帽子の内空間を広くして、車をそのなかに入れた。

咲夜「帽子の中に手を入れると、なんと車が出てきます!」

園児達「すげえ!」

霊夢「凄いわねえ。」

魔理沙「ほら霊夢、私たちも進めないと終わらないぜ!」

霊夢「それもそうね。」

そうして保護施設の児童と戯れ2週間後。

殺「この度は私たちの話を聞いてくださり、ありがとうございます。」

園長「生徒達を健全に育てるために、と頼まれたら同業者として断われんわい。さて、ガキの重みで木造の平屋が潰れてなければいいが、なんということでしょう!?!」

園長先生は大変驚いた。

## 死神の時間

霊夢「ちよつとした異変のせいではばらく行けなかったから早く行けないといけ  
ないに、」

レミリア「霊夢に続き今度は魔理沙が遅刻ね。」

魔理沙がスキマに入ってくる。

魔理沙「すまんすまん遅れたぜ！」

霊夢「遅れすぎよ！」

咲夜「さあ早く行きましょう。」

紫「開くわよ。」

紫は廊下スキマを開き皆がそこから教室に行く。

フラン「みんなおはよー！」

目の前に見たこと無い銀髪の人居た。

??「遅刻ですよ。霊夢さん、魔理沙さん、咲夜さん、レミリアさん、フランさん、  
とりさん。」

にとり「誰!？」

?? 「僕は死神と呼ばれる殺し屋です。今から君達に授業をしたいと思えます。」

霊夢 「授業ねえ。」

死神 「花はその美しさにより人間の警戒心を打ち消し、人の心を開きます。渚くん。君達に似たようにね。でも、花達が美しくかぐわしく

進化してきた本来の目的は、律さん。送った画像表示して。」

律が画像を表示する。

霊夢 「あ！あいつは！」

死神 「虫をおびき寄せるための物です。」

桃花 「ビッチ先生！」

死神 「手短に言います。彼女の命を守りたければ先生方には決して言わず君達全員で僕の指定する場所に来なさい。来なくなかったら来なくて良いよ。その時は彼女のほうを君達に届けます。全員に平等に行き渡るように小分けにして。そして次の花は君達の中の誰かにするでしょう。」

紫 (；；；、霊夢。)

霊夢 (何よ紫今忙しいのよ。)

紫 (その；；；、なんというか；；；、ビッチ先生もう助けたわ。)

霊夢 (；；；、は?)

紫（警備が甘かったからね。でも誰にも言わないで。）

霊夢（何だよ。）

紫（だって面白そうじゃない。）

霊夢（はあ。）

紫（魔理沙達にも伝えておくから。お願いね♪）

霊夢（はいはい。）

霊夢が前を見るといつの間にか死神は居なくなっていた。

悠馬「今夜18時までにはクラス全員で地図の場所に来てください。か。」

霊夢（ふーん。あんまり呼びたくないけど紫に頼むのも飽きたしなあ。『綿月豊姫』）

皆の前にスキマが開き、一人の月の住人が出てくる。

豊姫「あら？ここはどこかしら？」

霊夢「久しぶりね。こここの地図の印の場所を繋いでくれないかしら？」

豊姫「わかったわ。」

目の前の壁がコンクリートで出来た入り口に変わった。

霊夢「もう少し後ろにしてくれない？」

風景が下がっていき、野原も見えるようになった。

にとり「それじゃあ行こうか。」

皆が扉を開き地下室に行った。そしてアナウンスが流れる。  
死神「皆来たね。それじゃ、扉閉めるよ。」

## 圧倒の時間

業「やつぱりこつちの動きわかってんだあ。フラン、やつちやつて。」

フラン「わかった。ぎゅつとしてドカーン！」

複数の小さい爆破音が聞こえてくる。

レミリア「その調子よフラン。」

死神「ちよつとちよつと勝手に壊さないで欲しいな。」

にとり「それより約束の人、返してくれないかな？」

部屋が揺れ始める。

渚「部屋全体が下に！」

ガシャーン

死神「捕獲完了！この方法が一番リスクが無い。」

紫「あら、そのリスクの中にちゃんと賢者がいることも含まれてるかしら？」

霊夢「ついでに幻想郷の巫女と、」

魔理沙「魔法使い、」

レミフラ「吸血鬼に」

咲夜「時を操るメイド、」

にとり「最後に河童も含んでるかな？」

死神「それってどういう、；、」

霊夢「霊符『夢想封印』」

魔理沙「恋符『マスタースパーク』」

咲夜「幻符『殺人ドールズ』」

レミリア「神罰『幼きデーモンロード』」

フラン「秘弾『そして誰もいなくなるのか？』」

にとり「河童『スピン・ザ・セファリックブレード』」

紫「紫奥義『弾幕結界』」

7人は一斉にスペカを放ち目眩ましをした。

死神「眩し！」

紫「今の内に！」

紫はスキマを開き、部屋の外に皆を出させた。そして7人もその後スキマに入った。

死神「；、；、、良いね！そうこなくっちゃ！」

スキマ

霊夢「さっきの話し合いの結果別れたけど、；、；、」

死神「聞こえるかな？ E組の皆。実はね、君達が逃げてとても嬉しかったよ。未知の大物の前の肩慣らしだ。期待してるよ。」

レミリア「何よ強がっちゃって。」

紫「そんなかとよりほら、あの子達の前に例の死神が現れてるわよ。」

さとり「ところでさ、何でここにいるのよ？ まあ心読めるからわかるけど。」

霊夢「それより面白いことになってるじゃないの。渚が怯んでるわ。」

紫「聞いたところどうやら波長を使った攻撃みたいね。鈴仙呼びましょう。ついでに私達も行くわよ。」

魔理沙「あいよ」

死神の目の前にスキマが開き、そこからウサミミが垂れてきた。

死神「なんだこれ？」

そこから鈴仙・優曇華院・イナバが出てき、同じく猫だましをした。

死神「ああ；；、あ；；、」

鈴仙「どうかしら？ 自分の技をくらった気持ちには？」

霊夢「しばらく動けないから後で聞きましょう。それより、皆大丈夫？」

正義「う、正直キツイ。」

霊夢「しょうがないわねえ；；、紫、永琳呼んで。」



紫「了解。」

スキマが開く。

永琳「あら？どうしたかしら？てまあ！怪我人が沢山！治療しないきやね。」

永琳は持ち合わせの材料で人数分の回復薬を調合し皆に飲ませた。

霊夢「さてこい<sup>死</sup>つどうしようかしら？」

紫「、、しばらく妖怪の山で厳しさを学ばせましょう。」

## 番外編 死神の幻想郷

死神「ここは、どこだ？」

死神が目覚める。

？「あやや。やっと目覚めましたか。」

死神「あなたは誰？」

？「私の名前は射命丸文です。あなたの名前は？」

死神「僕の名前とか通り名は死神。」

文「なぜ通り名で名乗るのですか？普通の名前でお願いします。」

死神「本名はとつくの昔に捨てたよ。」

文「なるほど、それじゃあ現在確認されてる二人目の死神ですね！」

死神「僕以外にも死神？」

文「はい。あなたは人間ですが、あちらは本物の死神です。」

死神「本物、か。」

文「こんな話は置いといて、あなたに取材したいんですけど、よろしいですか？」

死神「もうすでに話してるけど、ところでなんていう記事で使うの？」

文「『妖怪の山に突如現れた人間に独占取材！この人間の目的とは！』です。」

死神「妖怪の山って？」

文「幻想郷にある妖怪がたくさん住んでる山です。」

死神「幻想郷って何？」

文「忘れ去られたものたちの楽園です。」

二人が話していると後ろから妖怪が襲いかつてきた。

妖怪「その人間を渡せ！」

文「うつとおしいですね！そんな妖怪は吹き飛んでください！」

文が持ってた団扇をひとふりすると、強力な風が吹き、2妖はどこかに吹き飛んでいった。

死神「聞きたいんだけどその団扇は？」

文「これ？これはひとふりで強風を起こせる普通の団扇です。」

死神（普通とは？まあ良い。きつとこの少女が僕をここに連れ出したに違いない！死神の名の下、こいつの命を！）

死神は手を銃の形にし、指に仕込まれた銃を打った。が、文はそれを高速で避けた。

文「あやや、いきなり攻撃的になりましたね。私が烏天狗じゃなかったら心臓の大動脈あたりにあたって、自らの血流圧でその裂け目が広がるところでした！」

死神「僕がするはずの台詞を！」

文「それはともかく、今の攻撃であなたは私を敵と見ていると捉えました。私の身をを守るために、あなたをここに放置してあなたを悪く新聞を書きます。それでは！」

文がどこかに飛んでいったとき、別の天狗らしきものがとんできた。

天狗Ⅰ「侵入者だー！捕らえろ！」

天狗が上から死神を捕まえようと飛んでき、死神は指の銃で撃ち落とそうとしたが、文と同様全て避けられ、やがて捕まってしまった。そしてどこかに移動させられた。

数分後

天狗Ⅰ「大天狗様！侵入者を確保しました！」

龍「よくやった！では私が裁きをくだそう。天魔様がやる程でもない。そいつは妖怪の山の登山下山を10往復させろ！」

天狗達「承知しました！」

## 学園祭の時間

紫「学園祭ねえ。楽しそうじゃない。」

渚「あ、紫さん。」

紫「あら覚えてくれてたの。私も協力するわ。少し待ってて。」

紫はスキマを開き、入った後、1分程で戻ってきた。

紫「これはどうかしら？」

殺「そ、それは！絶滅したとされる魚じゃないですか!？」

紫「あら、この魚そんなに珍しいのかしら？三途の川の漁師は釣れすぎて価値が下

がってるって嘆いてたけど。」

殺「こつちでは釣れないどころかもう釣ることができないですよ!」

紫「あらそうなの？まあ安いからあげるわ。」

渚「良いんですか!？」

紫「ええもちろん。好きに使って頂戴。塩焼きが美味しいわよ。」

殺「まさかの食材ですねえ！これと山産品と合わせればもう無敵でしょう!」

魔理沙「それにしても紫が珍しく協力的じゃないか?」

霊夢「ま、あいつの事だから何考えてるかわからないけど、とりあえず学園祭を楽しむわよ！」

魔理沙「それもそうだな。」

学園祭当日

意外にも繁盛はしていた（まあ文が広告で宣伝し、豊姫が山の麓から校舎までの入り口を繋いだことも関係してるが、）

客「うんめ！何これ？」

霊夢「確かそれは、」

咲夜『イトウの味噌焼き』です。」

時々前に会った人たちも来ていた。例えば

桜「おーい渚居るか？来てやったぞー！」

渚「桜ちゃん！松方さんと園の皆も！」

メグ「へえ、まだ付き合ってるだね渚。」

渚「うん、時々勉強教えに。」

桜「ま、私専属の家庭教師にお願いされたら来てやるしかないよねえ。」

陽斗「でかした渚！とりあえず客数だけは稼げたなあ。」

しばらく原作と同じため、割愛

しばらくしたとき、文が飛んでき、霊夢を教室に呼び出した。

霊夢「なによ文？」

文「なによとかじゃなくて単純に仕事量が多すぎます！」

霊夢「そうかしら」

文「そうですね！この町に宣伝しまくるって、この町どのぐらいの大きさか知ってます？！」

霊夢「うーん、幻想郷1000個分ぐらいかしら？」

文「そのぐらいまじであります！せめてもう少し客足を増やしてください！」

霊夢「はいはいわかったわよ。」（それじゃ、天狗追加しようかしらね。『犬走 椀』『姫海棠はたて』）

スキマが開きその中から2妖が出てくる。

文「；；、わかりましたよ行きますよ！」

文は2妖を連れて飛び出していった。余談だが、飛んでる姿を写真に取られ『未確認飛行物体の発見!?!』というタイトルで新聞に載った。

最終日

なぜか大行列が出来ていた。

霊夢「これはどうしたのよ!?!」

フラン「昨日はこんなじゃなかったよね？」

律「はい。昨日、有名なグルメブローガーと渚さんと会話しておりました。その結果と  
言うべきか、その人がブログにここについて書いたようです。」

霊夢（；；、天狗意味なかったわね。そういやあのピンク髪のアンテナ着けたやつ、ど  
こかで見たことあるわねえ；；、）



## 前後の時間

霊夢「そーいやもうそんな時期なのねえ。」

霊夢達は殺センセーなら学年末テストについて聞いて聞いていた。

霊夢「まあ今回もテストの問題用紙を化かせば、」

殺「いえ、今回はそれはやめてください。」

霊夢「、、、はい？」

フラン「ついに真剣勝負するのね。」

殺「その通り。いつもはA組に卑怯な手で勝つてますが、今回は普通にやりましょう。」

その分、勉強を頑張りますよ！

E組「はい。」

殺センセーは分身し、勉強会を始めた。

霊夢「あ、あとこっちからも2人、、、いや1人で良いや。呼んで良い？」

殺「いえ、今回はそれも無しです。代わりに君達の得意科目の授業をしましょう。そうすれば復習にもなりますし、知識が定着するはずですよ。」

霊夢「ふうん、わかっかわ。」

1 時間目と2 時間目の休み時間

渚「そーいや聞いた？」

悠馬「なにをだ？」

渚「今のA組の状況だよ。」

悠馬「ああ聞いた聞いた。理事長が先生やつてるんだよね。」

渚「うん；；、大丈夫なのかな；；、」

悠馬「理事長、わかりやすいんだけど、速いんだよねえ；；、」

しばらく；；、というかテスト後まで同じなので割愛

テスト返しの日

皆で喜んでると突然、大音になった。

霊夢「ちよつと、地震？倒壊すんじゃないの!？」

魔理沙「いや、あれを見てみる！」

そこには校舎を破壊している物；；、シヨベルカーがあつた。

霊夢（止めないと！ 『星熊 勇儀』）

目の前にスキマが開き、勇儀が現れる。

霊夢「あれを壊して！」

勇儀「なんだかわからねえが任せな！」

勇儀は1歩でシヨベルカーの元へ行き、2歩目で跳び、シヨベルカーを殴り破壊し、3歩目で戻ってきた。

勇儀「こんなもんか？」

霊夢「十分よ。」(帰還『星熊 勇儀』)

スキマから手が出てき、勇儀を連れ去った。

理事長「今朝の理事会で決まりました。この旧校舎は取り壊しです。あなたたちは勤務所を参考にした新校舎で卒業まで勉強してもらいます。」

にとり「おいおい、勝手なこと言うな！山破壊するな！」

理事長「それと殺センサー、あなたはもう私の教育には不要です。よってあなたは私が殺します。」

霊夢「解雇？そんなので殺センサーが引くわけ；；、てめちやくちや講義してるじゃない！」

理事長「それじゃあ一つ、賭けをしましょう。一度校舎へ。取り壊しは；；、再開できそうにないですね。」

2人は校舎へ入っていった。

理事長「それじゃあ賭けの内容を説明します。」

理事長説明中；；、

理事長「それでは、初めてください。」

殺センセーはワークを開く。

殺「平面図計算？」

殺センセーが慌ててるうちに、爆発した。

霊夢（あんなの無茶じゃない！なんか助けられそうなの奴は、；；、思い付かないわ！）

殺センセーは2冊目を開いたが、今度は爆発しなかった。

殺「はい！開いて解いて閉じました。」

霊夢（；；、はい？）

殺「この問題集シリーズ。どのページにどの問題があるか、覚えていきます。数学だけは難関でした。長い間生徒に貸して忘れていまして。」

霊夢（なあんだ。覚えてたんだ。というか日本中のやつ覚えたってどんぐらい時間かかったのかしら？）

殺センセーは解いていき、とうとう理事長の番になった。理事長はワークを開き、手榴弾が爆発した。

殺「；；、どうです？私の脱皮は？」

理事長「一ヶ月に一度の；；、」

しばらく同じため割愛

理事長が帰った後。

殺「そうそう、先生の決定的弱点を教える約束でしたねえ。先生、スピードに特化しすぎて、パワーが静止状態だと、触手一本ぐらいなら、一人で抑えられる。」

## 演劇の時間

殺「皆さん、今日はどんな日かわかりますか？」

業「あれでしょ？演劇。」

殺「はいそうです。今日はこの演劇でやるものなどを決めます。」

霊夢「殺センセー」

殺「なんですか霊夢さん？」

霊夢「私達さ、別でやって良い？」

殺「何故ですか？」

霊夢「演劇ってだいたい昔話でしょ？」

殺「はい、そうですね。」

霊夢「それだと私達こつちの昔話知らないからさ、幻想郷で起こった事をやろうていう風になったのよ。」

殺「そうですか？、わかりました。認めます。」

霊夢「ありがとう。」

放課後 スキマにて

霊夢「さて、今度の演劇の内容について決めるわよ！」

紫「それでここを使うのね。」

霊夢「いいじゃない。」

紫「まあ好きにしないさい。」

霊夢「と、いうわけで何か案あつたら手挙げて。」

魔理沙「あ、それじゃあ良いか？」

霊夢「良いよ。」

魔理沙「スペカルール初の異変、紅霧異変でどうよ。」

霊夢「ok、それで、他に案は、、、いないからそれで決定ね。」

レミリア「まあ私のカリスマを知らされるからね。」

霊夢「それじゃあ、内容はどうする？」

紫「一つ良いかしら？なるべくそのままの名前はやめて頂戴ね。一応のため。」

霊夢「わかった。それじゃあ名前を替えましょう。」

数日後

司会「それでは、最後は特別にお越しいただいた、本物の演劇団の演劇です。」

霊夢（あ、紫め、演劇団にしたな！まあ良いわ。）

司会「題名は『紅霧物語』」

幕が上がり、霊夢が準備し、幕が上がりきるとナレーターの輝夜（霊夢がナレーターを選ぶ時に人里で子供達に話しかけているのを思い出したため）が話し出す。

輝夜「むかーしむかし、ある国で晴杭はれくわいじんじや神社の巫女、晴杭むわい牟礼むれいが居ました。」

霊夢「この掃除が終わったからお茶でも飲もうかしら。」

輝夜「そんな平和な時を過ごしていたとき、突然紅い霧が国を包みました。」

霊夢「異変だわ！解決しましょう！」

輝夜「牟礼は異変を解決しに行きました。原因がいると思われる館に向かう途中で闇の妖怪と氷の妖精が喧嘩を売ってきましたが、牟礼は退治しました。」

霊夢はルーミアとチルノと簡易的な弾幕ゴッコをする。それだけでも観客から声がかかる。

輝夜「そして、牟礼はどうとうその館にたどり着きました。その館の門には門番もいました。牟礼は倒しました。」

チルノらと同様に簡易的な弾幕ゴッコをする。

霊夢「広いだけの館ねえ。」

輝夜「牟礼が歩いていると、図書館にたどり着きました。そこには一人の魔女がいました。」

霊夢「あんたもすぐに倒してあげるわ！」



輝夜「そう意気込みましたが、さきの戦いとは違い、厳しいものでした。」

霊夢とパチュリーはいつも通りの弾幕ゴッコをする。

輝夜「なんとか倒し、探索を続けるとメイドのような人がいました。」

霊夢「あんた誰よ？」

咲夜「私の名は飯坐夜優苦いゝざややさく！この館のメイド長！」

霊夢「もしたらこの館の主人の元に案内しなさい！」

咲夜「それなら私と戦い、勝ちなさい！」

輝夜「戦いが始まった瞬間、牟礼は驚きました。この一瞬で無数のナイフが出てきたためです。」

咲夜は時を止め、実際にナイフを投げる。もちろん観客に当たらないように。

霊夢「危ない！」

咲夜「ふうん、今のを避けるなんてなかなかね。」

輝夜「そこから攻防戦は続きました。しばらくし、なんとか牟礼は勝利しました。すると上から声がありました。」

レミリア「よくやったわ、優苦。ここからは、私、リミレア・スレッツカートが相手ですわ。」

輝夜「この館の主人が牟礼の前に来ました。」

霊夢「あんたね！この霧は！」

レミリア「そうよ。」

霊夢「早く戻しなさい！」

レミリア「良いわよ、でもそれだとせっかくの紅い月が勿体無い。ここは一つ、勝負をしましょう。」

すると、体育館の壁が全て倒れる。演出が入り、レミリアの後ろには大きな紅い月が浮かんでいた。

レミリア「さあ、月が紅い内に始めましょう！」

霊夢「、、もう後には引けないようね。」

レミリア「じゃあこっちから行くわよ。神罰『幼きデーモンロード』」

レミリアは今までのスペルカード（一応今までの登場人物発動させていた。）とは明らかに違っていた。その違いとは、発動させたのは本編でいう、L u n a t i cのスペルカードなのだ。

輝夜「今までの敵とは圧倒的に強いのでも牟礼は怯みませんでした。」

霊夢「密度が凄いわね。」

霊夢は今までの異変解決で培った弾幕避けスキルで難なく避けていた。

レミリア「獄符『千本の針の山』」

輝夜「牟礼は相手のすぎましく激しい攻撃に耐え、ついに相手最後の攻撃です。」

観客はその弾幕の美しさに感動と、赤の見すぎによる目の痛みをあげわった。

レミリア「『紅色の理想郷』」

レミリアはちゃんと、紫の言う通りに名前を変えたスペカを宣言した。そのスペカは大小の紅い弾幕をたくさんはる物だった。

輝夜「牟礼は最後の攻撃も耐えきり、勝利しました。そして、この異変を解決しました。めでたしめでたし。」

観客席から拍手喝采が起きた。

## 番外編 新年の暗殺教室

↳ E組校舎

渚「あけましておめでとう！皆！」

業「あけおめ」

悠馬「全員集まれて良かった」

業「え？まだ来てない人もいるけど？」

すると、校舎の前にスキマが開く。

紫「あけおめ」。

スキマの中から浴衣姿の紫や通ってる6人妖、さらに星も出てきた。

7人妖「あけおめ」

渚「あとは殺センサーだけだね！」

業「肝心の主催者が遅刻ねえ。」

すると、また校舎の前に殺センサーが飛んできた。

殺「遅くなってすいません。少し、世界一周日の出拝みしました。」

業「あれ？それだとまだ日の出出てない国あるよね？」

殺「はい。一回切り上げてこちらを優先しました。」

業「なるほどねえ。納得。」

殺「それじゃ始めましょう。年越し前にできなかつた、大掃除を！」

E組「おおー！」

殺センセーの掛け声と共にE組校舎の大掃除が始まつた。

星「それで私は何をすれば、」

霊夢「ん？あんたはもう帰つて良いわよ？」

星「え、じゃあなんで呼んだんですか？」

霊夢「今年の干支、寅年なのよ。それで、名前に虎がはいってるあんたを呼んだわけ。」

星「、、、わかりました（；▽；）」

星はスキマに入つていった。

霊夢「さてと、私達も始めましようかね。」

そう言うのと霊夢は雑巾を絞り、それで廊下を丁寧に拭いた。

魔理沙「埃を一ヶ所に集めて、ミニ八卦炉で消す。」

魔理沙は八卦炉で埃を消していた。

レミリア「ほらフラン、これ壊して。」

フラン「わかつた。ギョットして、ドカーン！」

レミフラは大きめの外にあるごみを壊していた。にとり「水流をここにやると、とれたとれた。」

にとりは床の汚れを水でとっていた。

咲夜「あ、ここにもあった。」

咲夜はBB弾が無いか捜していた。

紫「こんな汚れ、すぐ落とせるわね。」

紫は汚れの境界をいじり、綺麗にしていた。

数時間後

殺「では、そろそろこの辺にしておきましょうか。」

霊夢「ふう、疲れたわあ。」

殺「お疲れ様です皆様。それでは皆で初詣に行きましょう！歩きで行きますよ！近くにあるので。」

業「ああ、柵ヶ岡神社の事？」

殺「そうです！それでは、私も変装して、行きましょう！」

数時間後

霊夢「うわあ、めっちゃ混んでるわねえ、紫、あの賽銭箱、私のと変えてくれない

？（小声）

紫「やめなさい。」

紫は軽く扇子で叩いた。

殺「それはともかく、並びましょう。」

皆並んだ。

### 3 時間後

霊夢「やつと私達の番ね。5円玉をいれて、お辞儀」(今年は博麗神社に参拝客がたくさん来ますように。)

魔理沙(新しい魔法が使えるようになりますように。)

咲夜(お嬢様と妹様が安全でいられますように。)

レミリア(今年も私のカリスマが皆に伝わりますように。)

フラン(もう地下にいらなくても良くなりますように。)

にとり(発明が成功しますように。)

紫(幻想郷が安泰でいられますように。)

## 番外編 殺センサーの東方ボス化

ステージ名 月にいる死神

東方碎月者

内容 突如として都含む月の7割が破壊される異変が発生。これをとても重く見たへカーティア、紫、依姫がこの原因を調べ、その原因を消しに行く。(これは架空の作品の話です。このような作品は無いのでご注意ください。また、へカーティアはそんな重くは見えない気がします。)

ステージ 6面

場所 月の都跡上空

会話

・紫

紫「あらあら、やつぱり悲惨ねえ。そこにいるんでしょ？こうした犯人。」

殺「おや、気づかれましたか。」

紫「気づいちゃうのよ。それより、どう落とし前つけてくれるのかしら？とりあえず名乗りなさい。」



殺「私の名前はまだありません。」

紫「そう。じゃあ憎き黄色蛸野郎なんてどうかしら？」

殺「おや、良い名前ですね。ですがお断りしておきます。」

紫「あら、折角良い名前だと思つたのに、；、まあそれはどうでもいいとして、早くや  
りましょ。この世で最も美しい決闘。弾幕ごっこをね。」

殺「おや、それで良いんですか？」

紫「ええ、別に構わないわ。ささ、始めましょう！」

勝利後

殺「く、こうなつたら、逃げましょう！」

紫「あ、待ちなさい！、；、ちっ、逃したわ。」

・ヘカーティア（月）

ヘカーティア「専門分野だから来てみたものの、酷いわねえ。これじゃあ私が少し弱  
くなるじゃない。」

殺「それは申し訳ない。」

ヘカーティア「あんたが犯人？」

殺「そうですか？」

ヘカーティア「まあ悪いことした奴には罰を下さないといけないから、とりあえず弾

幕ごっこで地獄を見せて上げるわ！」

殺「おや？先程の人と違ってあまり怒ってないですね。」

へカーティア「あんま月好きじゃないのよ。」

殺「そうですか。まあ世間話はこちらまでにして、そろそろ始めましょう。」

勝利後

へカーティア「じゃ、罰下しはこのぐらいにして、釈放。」

殺「良いんですか？」

へカーティア「さっきも言ったじゃない。私あまり月好きじゃないのよ。」

殺「そうでしたね。ではお言葉に甘えて。」

・ 依姫

依姫「お姉様に瞬時に伊豆能売様で一部浄化した地上に都の住民らを移動させたから

良いものの、これは酷いわね。」

殺「おや、それはそれは。」

依姫「あんたのせいだね。この「自主制限」め。」

殺「うぐ、結構心にきますね、おっと不意打ちとは。しかも祇園様の力の宿った剣

で。」

依姫「ほう、見抜いたか。ならよろしい、前に地上人に習った『弾幕ごっこ』でお前

を八百万の神の怒りをぶつけてくれよう！」

殺「神様ですとお！」

勝利後

殺「月は厳しいですね、；；；ならば、地球に逃げましょう！」

依姫「あ、待て！、；；くそ、逃げられた。；；；何名かの神を降ろして月を直しましょう。」

二つ名 元死神の名を持つ蛸

能力 『超速度で移動することが出来る程度の能力』

弾幕

通常1

スペカ1 殺符「死神式暗殺術」

通常2

スペカ2 波符「ソニックブームの嵐」

通常3

スペカ3 独符「独りドッジボール」(耐久)

通常4

スペカ4 表情「表情色変化弾」

ラストスペル 「あぐりの死〜人生最大の後悔〜」

## 復讐の時間 1 時間目

パーン！

突然、校舎横から触手で何かを打つような音がした。

霊夢「なに!？」

魔理沙「なんなんだ今の音は!？」

霊夢達は音のしたほうに向かった。

悠馬「ここだ!」

きた時、轟音と共に殺センサーが出てきた。

渚「殺センサー!」

悠馬「さっきのは一体?」

また轟音がなり、カエデの体に緑の触手を付けた何かがあった。

有望子「か、茅野さん?」

にとり「その触手ってまさか!」

カエデ? 「あああ、渾身の一撃だったのに、逃がすなんて甘すぎね。私。」

殺「か、茅野さん。君はいつたい?」

カエデ? 「ごめんね。茅野カエデは本名じゃないの。雪村あぐりの妹。そう言えばわかるでしょ? この人殺し。しくじっちゃったものはしょうがない。きりかえなきや。明日またやるよ殺センセー。場所は直前に連絡する。触手を合わせて確信したよ。必ずやれる。いまの私なら。」

カエデ、もといあかりはどこかに行った。

糸成「あり得ない。メンテもなく触手を生やしてたら地獄のような苦しみが続くはずだ。表情変えずに耐え続けるなんて不可能だ!」

霊夢「一つ質問だけど、雪村あぐりって誰?」

悠馬「俺らの前の担任だよ。」

航輝「どつかで前に、茅野を見たことあるって思ってたんだ。キツメの表情と下ろした髪で思い出したんだ。磨瀬榛名って覚えてるか? どんな役でも軽々こなした天才子役。休業してしばらく経つし、雰囲気も全然違うから全然気づかなかった。」

その後、夕方、あかりについて皆が調べてる頃、

霊夢「ちよい、スキマ開きなさい!」

紫「なによ。」

霊夢「あんたじゃなくて、さとりのほうよ。」

さとり「どうしたかしら? 将棋の途中なんだけど。」

霊夢「将棋？そんなのさとり有利じゃない。」

紫「私の能力で封じたのよ。」

霊夢「ああ、あの時みたいだね。て話が逸れたわ。カエデが裏切ったのよ。」

さとり「ええ!?!全然そんな心境無かつたはず!」

霊夢「そうかあ!、あいつ演技の天才らしいのよ。だから心ごと演じきっていたのか  
も!」

紫「そしたら凄いわね。面霊気みたいわね。」

霊夢「、、ともかく、あいつ何かする気だからその時はお願いね。」

紫「任せて頂戴!いつもどおり、やるわね。」

さとり「興味あるわねえ、カエデ。」

殺センサーの携帯に『今夜7時 裏山すすき野原まで』とメールできた。

く???  
く

あかり「さあてと、邪魔が入らないように準備しますか。まず、吸血鬼対策の流水をバケツで常にかから出るようにして、河童には乾燥機。スキマには幻想郷の奴らと過ごして貯めた魔力と妖力を使ったスキマ封じ機ね。」

## 復讐の時間 2 時間目

あかり「来たね、、じゃあ、終わらせ！」

霊夢（『星熊勇儀』）

霊夢は勇儀を呼び出そうとしたが、来なかった。

くスキマ内く

紫「ちよつと！という事!？」

さとり「どうしたのよ！」

紫「スキマが、、霊夢達がいるところに開けないわ！」

さとり「なんだって！」

くすすき野原く

霊夢（なんで来ないのよ！）

あかり「殺センセー、センセーの名付け親は私だよ。ママがメツ、してあげる。」

殺「茅野さん、その触手をこれ以上使うのは危険すぎます！今すぐ抜いて治療しなければ命に関わる。」

あかり「何が？すこぶる快調だよ？はったりで動揺誘つても無駄よ。」

渚「茅野、今までののは全部演技だったの？楽しいこと、色々したのも、苦しいこと、皆で乗り越えたことも。」

あかり「演技だよ？これでも役者でさあ。」

魔理沙「お前！最低だな！」

レミリア「復讐に燃えた役者、ねえ。」

あかり「やる前に正体ばれたら、お姉ちゃんの仇とれないからさ。」

優月「お姉ちゃん、雪村先生。」

あかり「こんな怪物に殺されて、さぞ無念だったろうな。教師の仕事が大好きだった。皆のこと、ちよつと聞いてた。」

ちよつと割愛。

あかり「うるさい。部外者は黙つてて。どんな弱点も磨き上げれば武器になるつてそ  
う教えてくれたの先生だよ。体が熱くてしょうがないなら、もつともつと熱くして、全  
部触手に集めれば良い！」

殺「だめだ！それ以上は！」

あかりはすすきを円形に燃やした。

霊夢「ちよつと何してるの！にとり、消火して！」

にとり「無理だよお、ここら辺の水源がなぜか無いんだよ。」



レミリア「そしたら私達の出番かしら？」

レミフラが行こうとしたとき、上から雨のような水が降ってきた。

霊夢「対策バッチリね。」

あかり「当然じゃない。最高のコンディションだよ。全身が敏感になってるの。今ならどんな隙も見逃さない。」

渚「辞めろ茅野！こんな違う。僕も学習したんだ！自分の身を犠牲にして殺したつて、後には何も残らないって！」

あかり「自分の身を犠牲にするつもりはないよ渚。私はただこいつを殺すだけ！そうと決めたら一直線だから！」

魔理沙「あれヤバイんじゃないか!？」

霊夢「妖怪達が役立たずになつたし、；；、どうしようかしらねえ、；；、あんな状態じゃ、私らが行つても爪痕残せなそうだし。一応やってみましょう。」

霊夢は飛んで行こうとしたが。

霊夢「うわ！」

あかり「邪魔しないで。」

魔理沙「霊夢でもダメなのか!?!こうなつたら、；；、魔砲『ファイナルスパーク』」

あかりは触手で全て相殺する。

あかり「火力低いわね。」

咲夜「メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜もスペカを放ったが、

あかり「甘いわ。」

やはり触手でナイフを弾いた。そして、突然殺センサーがあかりを捕まえた。

殺「君のお姉さんに誓ったのです。君たちからこの手を離さないと。」

渚があかりの元に歩きだし、キスをした。咲夜がフランの目を抑える。

霊夢「ロマンチックねえ。」

魔理沙「まったくだぜ。」

あかりが気絶する。

殺「今です！今なら触手を抜ける。」

く数分後く

霊夢「これで大丈夫よね。」

殺「ええ。恐らく。しばらくは絶対安静ですが。」

渚の方を見ると、絡まれていた。

殺「ガハ！やはり、心臓の修復には時間がかかる。」

横から弾丸が飛んでくる。

シロ「瀕死アピールも大概にしろよ。躲す余裕があるじゃないか。使えない娘だ。自分の命と引き換えの復讐劇ならもう少し良いところまで見られると思つたのに。大した怪物だよ。いったい一年で何人の暗殺者を退けてるのやら。ただ、ここにはまだ二人ほど残つてる。最後は俺だ。全て奪つたお前に対し、命をもつて償わせる。」

殺「覆面を被り、声を変えた天才科学者。やはり君か。柳沢。」

柳沢「行こう二号、3月には呪われた命に完璧な死を。」

## 思想の時間

皆がカエデのことを心配してるなか、霊夢ら幻想組は、；；

紫「ほら霊夢達、帰ってきなさい。」

霊夢「紫じゃない。どうしたのよ？」

紫「少し異変が起こったのよ。」

魔理沙「それじゃ、私が一番乗りになろうかな〜」

霊夢「待ちなさい魔理沙！」

咲夜「お嬢様、妹様、私達も戻りますよ。」

レミリア「わかったわ。」

フラン「；；、わかった。」

ニトリ「私も戻ろうかな。」

6人妖はスキマに入る。

紫「では、また3学期にお会いしましょう。」

紫も入る。

そして三学期開始。

殺「皆さん、今日から三学期、よく学び、よく殺しましょう。では、ホームルームを終わります。」

殺センサーが廊下に出て、からしばらくして、いつの間にかいたイリーナ先生が話す。イリーナ「一番愚かな殺し方は感情や欲望で無計画に殺すこと、これはもう動物以下、そして次に愚かなのは自分の気持ちを殺しながら相手を殺すこと、報酬と引き換えに多くの物を失う。私のようにね。さんざん悩みなさい、餓鬼ども。」しばらくして、

渚「、、ねえみんな、後で裏山に来てくれない？」

レミリア「あら？珍しいじゃない。あなたが召集をするなんて。」

渚「話したいことがあるんだ。」

く裏山く

竜馬「で、話したいことはなんだ？」

渚「出きるかどうかは分からないけど、殺センサーの命を助ける方法を探したいんだ。」

霊夢「助ける。ねえ。」

陽菜乃「私賛成。殺センサーと、もっと生き物探したくい。」

ひなた「やれるだけやってみるのも良いかもね。」

莉桜「;;, こんな空気で言うのもなんだけど、私は反対。アサシンとターゲットが私達の絆、そう先生は言った。この一年で築いたその絆、私も大切だと感じる。だからこそ、殺さないといけないな、て。」

フラン「確かにねえ、それリスクあるし。」

莉桜の一言で少し;;, というか大分喧嘩した。そして、

殺「中学生の喧嘩、大いに結構、これで決めてはどうでしょう?」

皆「喧嘩の原因が自ら仲裁案出してきた!?!」

殺「先生を殺すべき派は赤、殺すべきではない派は青、まずしつかり全員が自分の意志を述べてどちらか選んでください。そしてこの山を戦場に戦い、勝った方の意見をクラスのものとする。勝っても負けても恨みつこ無し。それでどうでしょう? 先生は大事な生徒が選んだ意見を尊重したいのです。クラスが分裂したまま終わる。それだけほしないと先生と約束してください。」

悠馬「どうする? ;;;, よし、これで決めよう。殺すか、殺さないか?」

霊夢「私達は;;, どちらかに味方すると圧倒的になっちゃうから;;, 中立するわ。」

魔理沙「確かにそうだな。」

そして、しばらくして決まり、対抗戦が始まった。

;;, ;;;,  
先述の理由でカット。

烏間 「皆それぞれ思うことはあるだろう。戦って決めたクラスの方針に異論はない。ただし、条件が一つ。助ける方法を見つけるのは今月いっぱいまでだ。たどえ君らが殺すのを休止するにしても、あいつを殺そうとする組織はたくさんいる。殺すのは誰の他でもない。君たちに殺してほしい。1月の結果がどうであろうと、2月は暗殺に費やしてほしい。生かすも殺すも全力にだ。」

## 宇宙の時間

霊夢「;;、はい？今なんて言った？」

悠馬「ええと、ロケットに乗りたくない人;;、」

男子と幻想郷組、あとスキマが開き、

パチユリー「はいはいはい！」

パチユリーが手を挙げる。

霊夢「;;、私達がちよつとした異変解決してる間になにがあたのよ。」

殺「まだ一度も成功してない試験機ですが;;、それでも乗りたい人！」

糸成と幻想組以外下げる。

悠馬「ええと;;、2人までなんだよねえ;;、」

咲夜「;;、私、空間広げられるわ。」

悠馬「あ、そっか。」

その後しばらく話し合い、業と渚、幻想組＋パチユリーに決まった。

悠馬「それじゃ、これで決まりだな。」

実行当日　くスキマ内く



紫「それじゃあ開くわよ。咲夜、用意して。」

咲夜「了解。」

紫がロケット内にスキマを開く。

律「監視室の映像の変更完了しました！」

咲夜「OK」

咲夜は能力で出来る限り空間を広げた。

紫「それじゃあ次の二人お願い。」

勇儀「任せときな！」

白蓮「お任せください。」

二人はあらかじめ用意していた家具などをロケット内に配置した。

紫「そして、家具の重と軽の境界を無くしたから重さが無くなったわ。これで通常の

ロケットとほぼ同じよ。」

勇儀「固定完了した！」

紫「ありがとう。それじゃあ、入って。」

6人妖はロケットに入り、それと同時に業と渚も来た。

業「おお、凄いねえ。短時間でこんなにできるなんて。」

全員、宇宙服を着る。そして10秒後

シユゴオオオ

霊夢「おおお！」

ニトリ「ロケットすげえ！」

殺「にゅや、さすがに速い。」

渚「なんで着いてきてんの殺センサー！」

殺「いやあ、少し心配になりました、先生のデータを取るのにこだわりすぎないように、それよりもせっかくの宇宙の旅を楽しんでください。」

渚「殺センサー、これだけは言っておきたいんだ。自分の命をとことん利用して、僕らの学習の機会をくれる。それは本当にありがたいけど、僕らにとつての殺センサーの命は教材だけで終わるほどの軽いものではないよ。」

殺「わかってます。嬉しいですよ。うにゅにゅにゅにゅ、うにゃー！は、速！」  
しばらくして、

フラン「わあ、フワフワしてきた！昔読んだ本は正しかったんだー！」

霊夢「この感覚久しぶりね。」

各々が話してる間、扉が開いた。2人が話してる間

レミリア「咲夜、聞こえてるかしら？久しぶりね。あの言語。」

咲夜「そうですね。覚えてますよね。」

レミリア「もちろんよ。」

霊夢「なんて言ってるか分からないわ。」

魔理沙「同じくだせ。」

ニトリ「翻訳機あるけど、いる？」

2人「欲しい！」

ニトリが渡す。すると渚と業が近づいてくる。

業「話し通ったから。けど、ちょっと手伝いをしてくれない？」

霊夢「OK。」

手伝うこと3時間。かえる直前。

律「コピーしてお借りします。」

霊夢「これで目的達成ね。」

業「おっさん、これやるよ。ぶっちゃけ中身羊羹なんだわ。」

乗組員「オウノー！」

展開が同一のため、割愛。着陸

霊夢「ふぁーあ。おわたたのねー。」

パチュリー「楽しかったわ！」

殺「それでは、データを確認しましょう。」

くE組く

フラン「難しいわよ！」

渚「つまり、爆発する確率はとても低くできるよ。」

## 写真の時間

渚「卒業アルバム作るって、」

陽菜乃「そっかあ、学校全体のは作っちゃったもんね。烏間先生が担任ってことで。」

霊夢「それに私達のも入れられないんじゃない？」

紫「私が許可したわよ。」

魔理沙「それなら良いじゃないか！」

桃花「でもそこに殺センセーの一枚も写ってないのは可哀想だね。」

龍之介「いや、ちよいちよいマツハで写り込んではい。ばれない程度に。」

霊夢「これじゃ、幽々子が写ってる写真と同じじゃない？」

殺「そう、だからちゃんとかつちの写真も使いたいです！あれやこれやで隙をつい

ては1年！皆さんと写った秘蔵の自撮り写真4万枚！この中から皆さんとベストな写

真を選びましょう！」

咲夜「いつの間にそんなに撮ったんですか!？」

霊夢「どつかの烏天狗かしら？」

莉桜「私、あまり自分の写真見たくないんだよねえ。」

優月「どうして？」

莉桜「目ちつちやいから。」

殺「ご安心を目大きく加工したバージョンもございます。」

莉桜「相変わらず手厚いことで。」

友人「確かにベタなのは正規のアルバムで十分だし。」

美鈴「もう一冊作るなら意外性のある写真とか？」

殺「お任せあれ、幻想郷賢者八雲紫さんの部下の八雲藍さん、彼女の天才的数学スキルでは考えられないような算数での計算ミス写真！あとこれも、幻想郷の巫女博麗霊夢、宴会にて易者討伐の真似！」

スキマが開き、

藍「なんでそんなものがあるのよ！」

霊夢「というかそれ幻想郷での出来事じゃなかった!？」

殺「ぬるふふふふ、皆さんが帰る時に使うスキマから時々入ってたんです。」

藍「紫様!？」

紫「アラソウダッタノネゼンゼンキガツカナカッターワ」

殺「まだまだありますよ！姉妹揃って湖に落ちる寸前で咲夜さんに助けられたドジっ子スカーレット！ゴキブリが出た瞬間の乙女村松！夜の校庭を駆け回るネイキツ

ト岡島！」

岡島「ちよつとまで！その中には俺のすげえやばい写真があるんじゃないか!？」

にとり「もつとやばいのつて、」

ほぼ皆「自分の探せ！そして処分しろ！」

殺「おやおや編集作業に熱がこもってきましたねえ。」

『スイーツ食べ放題頼む仙人!』『3歩歩き物事忘れる八咫鳥』『カメラを落とす新聞記者!』など幻想郷の住人の写真も多く、多くの住人がスキマを通じて来て、それを破いた。

皆「こんな所まで、」

殺「まだまだ足りません！追加で撮影しましょう！」

『段幕ゴツコの再現』『オリジナルスペカ?』『外と幻想の教師』などの写真も追加された。

殺「これで校内での写真は十分でしょう。」

霊夢「十分ならなんで私らはバッグに詰められてるのよ！」

殺「この校舎ではとても足りない！世界中で皆さんと撮るのです！」

霊夢「はあ!？」

紫「今から!?!なんでそこまでして！」

殺「楽しいからですよ！楽しいからこそ手間暇かけて工夫して力の限り取り組めるんです！行きますよ！ゴムゴムのパチンコ！」

時間はとび夜ごろ　く博麗神社く

霊夢は布団を出し、着替えようとしてたとき、スキマが開き、

紫「霊夢！大変だわ！」

霊夢「どうしたのよ。そんなに慌てて。」

紫「『最終暗殺プログラム』というやばそうなのが発動したわ！他5人は揃ってるわ！とにかく来て頂戴！」

霊夢「わかったわよ！」

霊夢はスキマに入っていった。



## 巫女の時間

霊夢「で、どういう意味かしら？ 『最終暗殺プログラム』は。」

紫「それは、対センサー用の壁で覆って、そこにレーザーを撃ち込むって言うやつらしいわ！」

魔理沙「良くわからないけど、わかった！」

フラン「ヤバイっていうことだよな？」

紫「そうよ。」

レミリア「したら早くスキマを繋げなさい。」

紫「わかったわ。」

紫はスキマを開いた。

霊夢「あら、気が利くじゃない。学校前に開いてくれるなんて。」

紫「緊急事態なのよ？」

7人妖はスキマから出た。

殺「あなた方ですか。」

霊夢「あら、余裕そうね。」

殺「ええ。あの子達が来ると思いましたので。」

会話してるときに後ろからE組が出てきた。

殺「音だけでもわかりましたよ。成長しましたねえ。皆さん。」

渚「先生！」

紫「お久しぶり。」

にとり「あれが例のやつか？」

殺「なるほどねえ、私を殺すレーザーの発射は日付が変わる直前ですか。あの出力なら完全防御形態も無効化するでしょう。」

紫「でも、たかが光でしょう。それなら、」

紫はスキマからサニーホワイトを連れ出した。

紫「あそこからの光がここまで来ないようにして頂戴。」

ホワイト「しようがないなあ。」

一部省略（展開、会話が同じため。）

殺「本当ですよ。」

すると突然、周りを覆っていた半透明の壁が全て消え、代わりに大きな対先生用ナイフが覆うように現れた。

霊夢「、、紫何かやった？」

紫「いや。やってないわ。」

魔理沙「これみたいなの、前に見なかったか？」

??「久しぶりね。そして初めまして。」

レミリア「その声は！」

7人妖は振り向いた。

霊夢「綿月依姫に綿月豊姫、」

依姫「そうよ。」

魔理沙「何でここにいるんだぜ！」

渚「ちよっと待って！この人達誰!？」

依姫「ごめんなさい。私の名前は綿月依姫。月で巫女をやってるわ。」

悠馬「月って空に浮かんでる？」

依姫「そうよ。」

豊姫「で、私が綿月豊姫よ。一回あったような気がするけど、まあ良いわ。」

業「ところで、『能力』は？」

依姫「私は『神霊を呼ぶことができる程度の能力』よ。八百万の神の力を使えるわ。」

豊姫「私が『山と海を繋ぐことができる程度の能力』ね。転移系の最高峰とんでも

らえれば良いわ。」

正義「神ってどんぐらいだ？」

依姫「文字通り800万よ。そんなことより、私達が来たのは殺センサー、今度こそあなたを殺すためよ。月をも直す私達に今度こそ殺されなさい！」

渚「月を直した!？」

霊夢「あんた達だったのね。」

依姫「外野は黙ってなさい。それじゃあ、」

依豊姫「始めましょう！」

## 決闘の時間

紫「大分不味いわね、」

上空には依姫が神降ろしをし、殺センサーと戦い、豊姫が能力を利用して投擲武器を当てていた。

依姫「愛宕様の火よ、目前の生物を焼き尽くせ！」

殺センサーに向かって火球が飛ぶ。

殺「あらよつと。」

殺センサーはマツハで避け続け、近くの地面に落とされた。落下地点で生徒の者でない悲鳴が聞こえた気がした。

殺「ふむ、相当な熱量ですねえ。」

下を見ると依姫が近づいてきた

殺「速い！」

すると横から対先生ナイフが飛んできた。

豊姫「ふふふ、私の事も忘れないでね。」

渚「紫さん！どうにかできませんか!？」

紫「いや、；、できないわ。地上の者が月の使者に勝てるはずがない。」

渚「そんな、；、」

殺「いえ！まだ諦めてはいけません！最後までやらないとわからないでしょう!？」

依姫「さあ、どうでしょうね。」

依姫が刀を地面に突き立て、殺センサーの下からたくさんの刀が捕らえようと出てきた。

殺「これはすごいですね、；、ですが遅いですね。もう少し速くすべきです。」

殺センサーは難なく避ける。

依姫「さすが超生物。あの速さでは捕らえられないか、；、では、その自慢のスピードはどんな状況でも行けるかしら？」

殺「もちろんです！」

依姫「では見せてみる！『須佐之男命』よ！速度を落とさない超生物に速度衰退を知らせよ！」

そう言った瞬間、周りには暴風雨で、吹き荒れた。

渚「うわ！」

咲夜「気を付けてください！天気が荒らされました！」

レミリア「く、吸血鬼の私達にはきついわね、；、」

依姫「さあ、どうかしら、なるほど。本当に衰退しないのか。では、私も本気を出そう。『建御名方神』よ！少女でもあの超生物に勝利可能の武の力を我に与えよ！」

殺「『建御名方神』ですって!?!あの武田信玄が信仰していた神様じゃないですか!?!」

依姫は殺センサーの元へ飛び、素早く触手の一本を千切った。

依姫「あら、案外簡単に取れるのね。、、。」

依姫は触手に齧る。

依姫「、、昔食べたタコの味ね。そのまんまだわ。」

依姫な触手を投げ捨てる。

紫「あら？月に蛸なんているのね。」

依姫「そんなことより、ピンチじゃないかしら？殺センサー?！」

殺センサーは触手を再生した。そのとき何が貫通する音が聞こえた。

殺「なんででしょうか!?!」

殺センサーが音の元を見ると、茅野が触手で貫通していた。

殺「茅野さん!」

殺センサーは茅野の元に向かった。

依姫「あら、申し訳ない。では、続けましょう?！」

殺センサーは激怒し、凄まじいオーラを出した。

霊夢「渚！茅野を回収して！」

渚「任せて！」

渚が茅野を回収する。

紫「永琳を呼んだわ！」

永琳「酷い傷！直ぐに手当てしましょう！」

殺せんせーはオーラをぶつけた。

依姫「光を切るのは水よりも容易い。」

依姫はオーラを切ろうとした。

霊夢「色が変わった!?!」

紫「黄色に」

レミリア「赤に」

フラン「緑に、」

魔理沙「白。」

殺「全ての色を全ての感情を全ての過去を全ての命を全て混ぜて、純白のエネルギーに、月の巫女よ、これは光ではない。私達E組が築き上げた全てだ！」

その光線は依姫と近くの豊姫を貫いた。

依豊姫「うわあああ!!」



2人は吹き飛び、気絶した。その隙に紫が月に送り返した。  
渚「か、勝った、」

## 最終回 別れの時間

殺センサーが皆の前に来る。

渚「先生、茅野が、」

永琳「これは私でも治療が難しいわ、」  
皆が泣き出す。

龍之介「寝かせてあげよう」

殺「降ろさないで渚くん。あまり地面の雑菌に触れさせたくない。」

渚「殺センサー、」

殺「皆さん、失った過去は決して戻ってきません。先生自信もたくさんのおちを冒してきました。ですが過去を教訓に繰り返し返さないことは出来ます。」

永琳「それはもしかして、この子の細胞とか血液!？」

殺「はい。」

紫「ふうんバトル中に圧縮空気で作ったのねえ。」

殺「そうです。君たちを守るための触手だけは戦いに使わずに温存してましたから。今から一つ一つの全ての細胞を繋ぎます。」

霊夢「そんなこと出来るの!？」

フラン「凄いいじゃない。」

殺「より速く、より精密にこの一年、ずっと能力を高めてきました。あの日と同じことがあっても。同じ悲劇には絶対すまいと。修復できない細胞もあるのでそこに隙間を作り、先生の粘液で穴埋めします。数日の内に彼女自信の細胞が再生し、置き換わるでしょう。血液も少々足りません。A B型の人、協力を。中村さん! さっきのバースデーケーキを一欠片先生の口に!」

魔理沙「おい汚いぞ。地面に落ちてるんだぜ!」

殺「エネルギーの補充が必要なんです! 戦闘中もずっと食べたかったし! ああ30分ルールです!」

咲夜「30分!、そんなあったら雑菌移り放題よ。」

殺「うまいうまい。ふう、後は心臓さえ動けば蘇生完了します。『生徒が土手つ腹を貫かれたときの対処法マニュアル』通り完璧なはずです。」

レミリア「そんなのがあるのね。」

紫「電気のエキスパート呼んどいたわ。」

蘇我は茅野のお腹に手を当て、電気を通した。そうしたとき、かえでが蘇生した。

渚「茅野!、良かった!、」

殺センサーが倒れた。

殺「ふう、疲れました。皆さん、暗殺者が瀕死のターゲットを逃がしてどうしますか。わかりませんか。殺し時ですよ。楽しい時間は必ず終わりを迎えるのです。それが教室というものですから。」

悠馬「皆、俺たちが決めなければならない。」

紫「妖精もどつか逃げちやったし、」

悠馬「このまま手を下さずに天に任せる選択肢もある。手を挙げてくれ。殺センサーを殺したくないやつ。」

皆が手を挙げる。

悠馬「OK。手を下げて。殺したいやつ。」

数秒して、手を挙げた。そして、殺センサーを抑えた。

霊夢「こうしたら動けないのよね。」

殺「そうです。何名か力が弱いのが気になりますかねえ。」

メグ「ネクタイの下、心臓なんだよね。最後は誰が、」

渚「お願い皆、僕にやらせて。」

竜馬「誰も文句はねえ。」

業「この教室では、渚が首席だ。先生、」

殺「、、、渚君。ネクタイの上から刺せますよ。貫ったその日に穴を明けてしまったので。そのままにしておきました。これも大事な縁ですから。さてその前に先生方に挨拶しておかなくては。イリーナ先生、参加しなくて良いんですか？賞金獲得のチャンスなのに。」

イリーナ「私は十分貫った。ガキどもからも、あんたからも。たくさんの絆と経験を。この暗殺はあんたとガキどもとの絆だ。」

殺「そして、烏間先生、あなたが生徒をこんなに成長させてくれた。これからも生徒達の相談に乗ってあげてください。」

烏間「ああ、お前には散々苦勞させられたのだ。この一年は一生忘れることはない。さよなら。殺センサー。さて皆さん、いよいよですね。一人一人にお別れの言葉を言っていたら24時間あっても足りません。長い会話は不要です。その代わり最後に出欠を取ります。一人一人先生の目を見て、大きな声で返事をしてください。全員が返事を終えたら殺してよし。ま、まさかこのタイミングで早退した人とかいませんよね！このタイミングで返事無かったら先生自殺しますからね！」

皆「速くやれ！」

出欠確認後

殺「本当に本当に楽しい一年でした。皆さんに暗殺されて、先生は幸せです。旅立つ

者から旅立つ者へ命丸ごとエールを」

ニトリ「うっ、泣かせてくれくれるよ、」

永琳「外部者の私が言うのも何だけど感動的ね。」

渚「うおおお！」

殺「そんな気持ちで殺してはいけません。落ち着いて、笑顔で。」

渚「、、、、、さようなら。殺センサー」

殺「はい、さようなら。」

渚はナイフを刺した。体が光だし、殺センサーは消滅していった。皆号泣した。

霊夢「うーん、」

霊夢が目覚めたとき、そこは博麗神社だった。

霊夢「夢？いや違うよね。」

紫「さあ、それはどうかしらね。」

霊夢「何よその言い方。」

紫「私が境界弄った可能性は？」

霊夢「無いわ。」

紫「ふふふ、あなたの勘はやっぱ凄いわね。神社の中にお土産置いといたわ。」

霊夢がみると、そこには卒業アルバムとアトバイスブックが置いてあった。

〈完〉